

生物多様性なごや戦略

(最終案)

目次

第1章 生物多様なごや戦略とは	1
(1) 生物多様なごや戦略で伝えたいこと	3
(2) 戦略策定の背景と手法	5
(3) 戦略の全体構成	7
コラム：生物多様性	9
コラム：生物多様性の恵み（生態系サービス）	10
第2章 自然が創り、人が造ったなごや <歴史編>	11
(1) 自然の摂理が創った大地と生きもの	12
①地球の変動が創った3つの地形	13
②環境からみえるなごやの固有性	15
③人の手が入る前のなごやの生きもの	17
コラム：地形の変動と植物～東海丘陵要素の植物～	19
(2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり	20
①3つの地形に人が広がる	21
②西部には田んぼや畑が広がる	23
③東部には里山が造られる	25
④中央部には町が発達する	27
⑤100年前のなごやの姿	29
コラム：地名と地形を比べてみると・・・	33
(3) 近代都市なごやの発展	34
①近代都市としてのなごやの変貌	35
②20世紀後半の急激な変化（まち）	37
③20世紀後半の急激な変化（暮らし）	39
第3章 現在のなごやの姿 <現状編>	41
(1) 身近な隣人－なごやの生きものたち	42
①今のなごやの生きものたち	43
②なごやの生物多様性マップ	45
③世界からみた、なごやの生物多様性	47
コラム：ため池となごや	49

(2) 快適な人の暮らしと生きもの	50
① 生きものにとって暮らしにくいまち	51
② 人の予想を越えて広がる生きものたち	53
③ いつまでも買えると思うな地球資源	55
④ 失われてきた地域のつながり	57
⑤ 生物多様性とわたしたちの安全	59
コラム：いつまでも買えると思うな、地球資源	61
(3) 生きものからいただく豊かな心	62
① 生きものからいただく豊かな心	63
(4) 社会情勢の変化のきざし	66
① 社会情勢の変化のきざし	67
② 第2章～第3章の総括となごやをめぐる危機	69
 第4章 望ましいなごやの姿 <展望編>	71
(1) 2050年に向けたビジョンと戦略	72
戦略1：自然に支えられた健康なまちの創造	73
戦略2：環境負荷の少ない暮らし・ビジネスの創造	75
戦略3：自然とともに生きる文化の創造	77
戦略4：生物多様性を再生し、活かすしくみづくり	79
コラム：(未定)	81
(2) 100年後のなごやの姿	82
① 100年後のなごやの姿	83
 第5章 もう、始まっています <実践編>	87
(1) 健康なまちづくりにつながる動き	89
(2) 暮らしやビジネスの変化につながる動き	91
(3) 新しい担い手や地域づくりにつながる動き	93
(4) しくみづくりにつながる動き	95
(5) 横断的な取り組みに向けて	97

第1章 生物多様性なごや戦略とは

— この戦略からはじまるなごやの生物多様性 —

「むか〜しむかし、瀬戸からなごやをとおり知多半島にいたる丘陵地には、連続した緑豊かな森がありました。」

こんな想像をしてみてください。もし、今でも、その森が残っていたら？

「ごんぎつね」は、ふるさと半田から「モリゾーとキッコロ」に会いに海上^{かいしよ}の森まで旅をしたのではないのでしょうか？そして、緑豊かな東山公園に、あるいは水辺の環境豊かな天白川に、ちょっと立ち寄ったかもしれません。

少し前の時代まで、なごやを含めたその周辺には、“豊かな自然（多様な自然）”が残っていました。便利で快適な暮らしを手に入れたことと引きかえに、わたしたちはそれらを失ってしまったのです。このままでは、今度はわたしたちが“暮らし”を失うことになります。そのようなことにならないように、未来につづく持続可能な自然と暮らしをつくるために、わたしたちの取り組む課題を示したのが「生物多様性なごや戦略」です。

前 文

(1) 生物多様性なごや戦略で伝えたいこと

なぜ、生物多様性を保全するの？

わたしたちは、さまざまな生きものに支えられています

- ・わたしたちは、生きるために、食べものだけではなく衣服や住まいの材料、薬の原料など、多くのものを自然の中からもらっています。
- ・たとえば、山に降った雨は川によって運ばれ、わたしたちが毎日利用する水になります。
- ・また、自然とのふれあいの場や、自然の中で感じるいやしの効果など、自然そのものからもさまざまな形で支えられています。

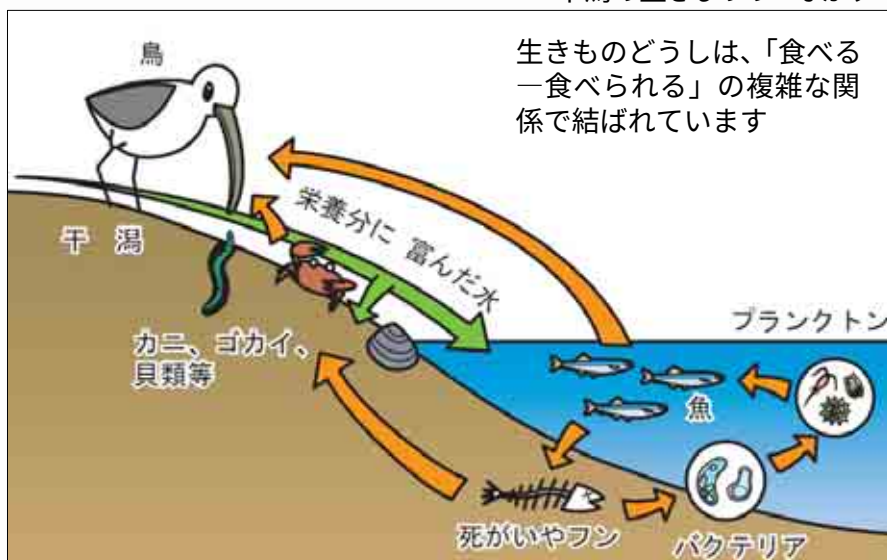
生きものは、互いにつながりをもって生きています

- ・すべての生きものは、互いにつながりや役割をもって生きています。
- ・つながりが切れてしまうと、他の生きものが困ってしまうだけでなく、わたしたちの食べものがとれなくなるなど、安心した暮らしがなくなってしまうかもしれません。

暮らしにあふれる生態系サービス
(自然の恵み)



干潟の生きもののつながり



大都市なごやにも関係があるの？

なごやは、世界中の生物多様性に依存しています

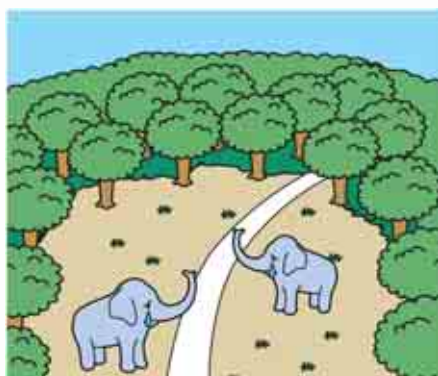
- ・現在、わたしたちは、外国から輸入される食品やエネルギー、つまり世界の生きものに多くを依存しています。
- ・毎日の食事や衣服、家具など身の回りにあるものはどこから来ているのでしょうか。



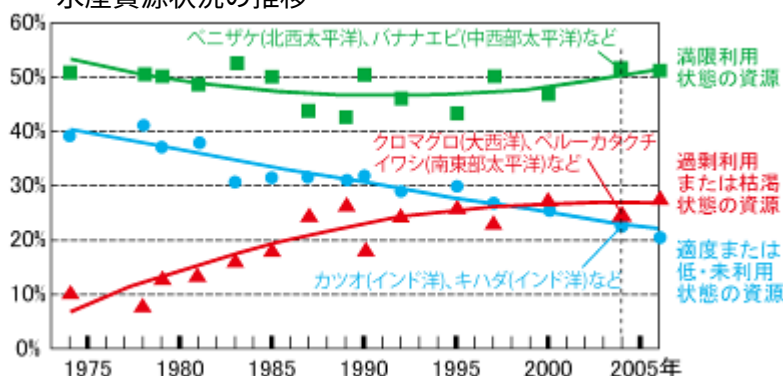
わたしたちは、世界中の生物多様性に影響を与えています

- ・日本は木材の76%を海外から輸入していますが（平成20年）、生産国のなかには、森林伐採や野生生物の生息地減少などが問題になっているところもあります。
- ・世界の海面漁業（養殖を除く）の生産量は頭打ちの状態にあり、日本を始め消費国には水産資源の持続的利用に向けた管理の強化が求められています。

野生生物の生息地破壊



水産資源状況の推移



出典：平成20年度水産白書（水産庁）より作成

備考：満限とは、漁獲量とその資源にとって持続的に達成可能な最大（あるいは高水準）の漁獲量に達している状態をいう

わたしたちができること

身近な自然を保全・再生しましょう

- まずは、あしもとの“わずかに残るなごやの自然”にしっかり目を向け、大切にしましょう。
- 身近な自然を大切にすることが、世界の生態系を保全することにつながります。



生活スタイルを転換しましょう

- 現在のようにたくさんの“モノ”を消費する生活は、いつまでも続くものではありません。
- 現在の生活を見直し、古来からの知恵や文化を生かして、自分たちの力で暮らしを支えていきましょう。

(2) 戦略策定の背景と手法

生物多様性をめぐる世界と日本、なごやの動き

- ・1992年開催の「地球サミット」において「生物多様性条約」が採択され、生物全般の保全に関する国際的な取り決めができました。日本は1993年にこの条約を締結しました。
- ・1995年には国家戦略が策定され、生物多様性に関する制度が整えられてきました。
- ・2010年、COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）がなごやで開催されます。それに先立ち、なごやではこの戦略を策定しました。

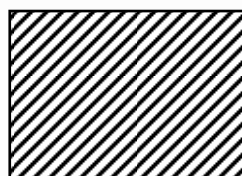
年	世界	日本	なごや
1992	地球サミット(ブラジル・リオデジャネイロ) 「生物多様性条約」採択 (写真①)	生物多様性条約署名 「種の保存法」制定	
1993	生物多様性条約発効	生物多様性条約締結	
1995		「生物多様性国家戦略」策定	
1996			「環境基本条例」制定 ◆前文に「人と自然が共生することができる健全で恵み豊かな環境を保全」
1999	ExCOP1(コロンビア・カルタヘナ) 「カルタヘナ議定書」討議 ◆遺伝子組換え生物の国境を越える移動について規制の必要性を決議		「藤前干潟最終処分場建設計画」断念 (写真②) ◆全国的な環境意識の高まり 「環境基本計画」策定 ◆「環境首都なごや」の実現へ
2000	カルタヘナ議定書採択		
2001			藤前干潟「ラムサール条約」登録
2002	COP6(オランダ・ハーグ) 「2010年目標」採択 ◆「2010年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させること」を目標	「自然再生推進法」制定 「(第二次)生物多様性国家戦略」策定	
2003		カルタヘナ議定書締結	
2004		「外来生物法」制定	
2005	国連「ミレニアム生態系評価(MA)」発表		「愛・地球博」開催 ◆市民の環境意識の高まり
2006	COP8(ブラジル・クリチバ) 「生物多様性保全における企業の役割の重要性」を指摘		「(第二次)環境基本計画」策定 ◆「人と自然が共生する快適な都市」を明記
2007		「(第三次)生物多様性国家戦略」策定	
2008	COP9(ドイツ・ボン) 「COP10開催地なごや」決定 (写真③)	「生物多様性基本法」制定	
2010	COP10(日本・なごや)		「生物多様性なごや戦略」策定

写真①



「どうやって直すのかわからないものを、こわしつづけるのはもうやめてください。」
(12歳の少女、セヴァン・スズキのスピーチ)

写真②



守られた藤前干潟

写真③



COP10なごや決定時の関係者たち

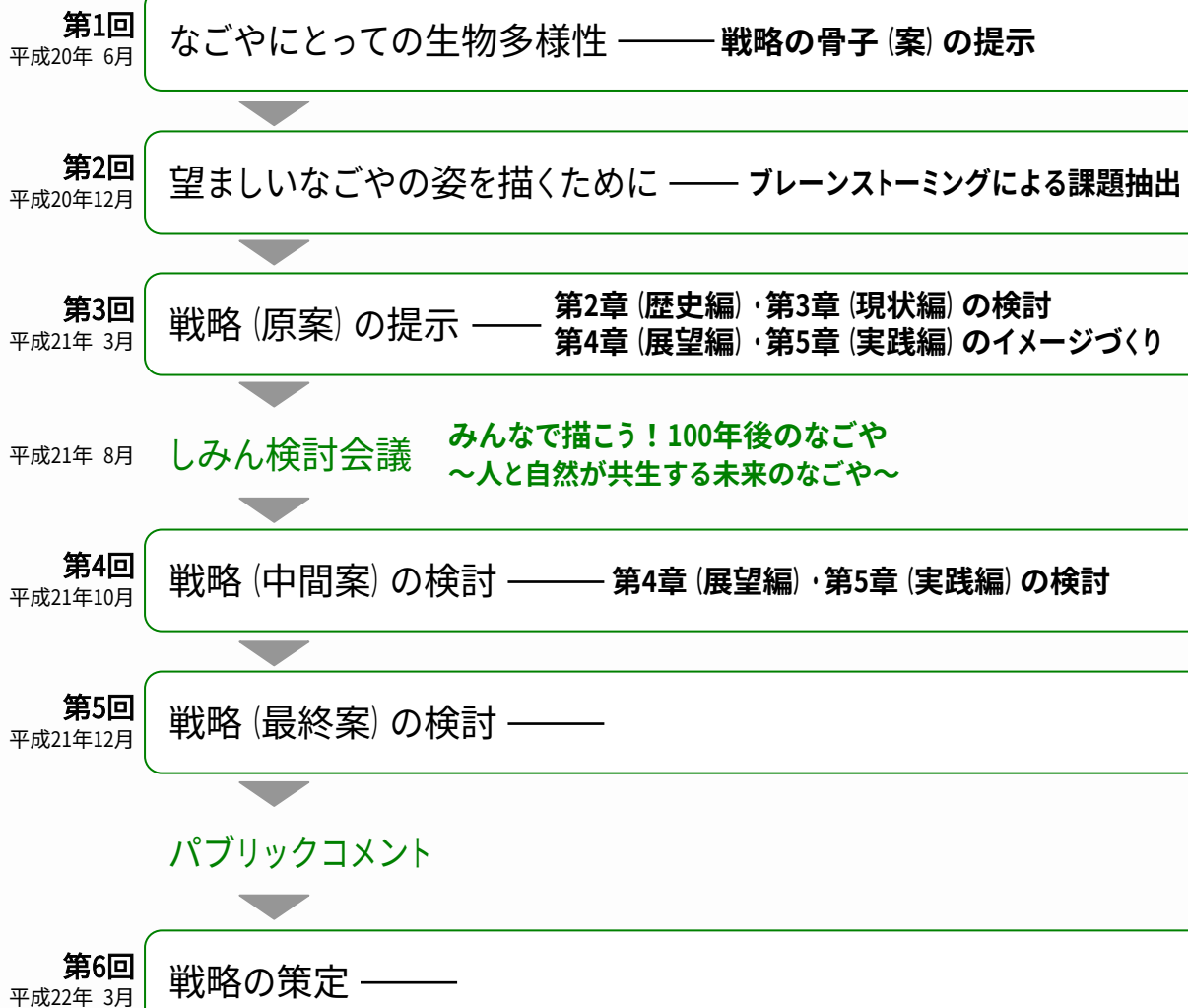
COP: Conference of the Parties (締約国会議)

ExCOP: Extraordinary Meeting of the Conference of the Parties (特別締約国会議)

ラムサール条約: 特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約

生物多様なごや戦略策定会議

- ・この戦略は、「戦略策定会議」を通じ、市民との協働によって策定しました。
- ・「戦略策定会議」は、専門家や生物多様性アドバイザー、なごや環境大学のメンバー、NPOや地域の市民有志などで構成しました。



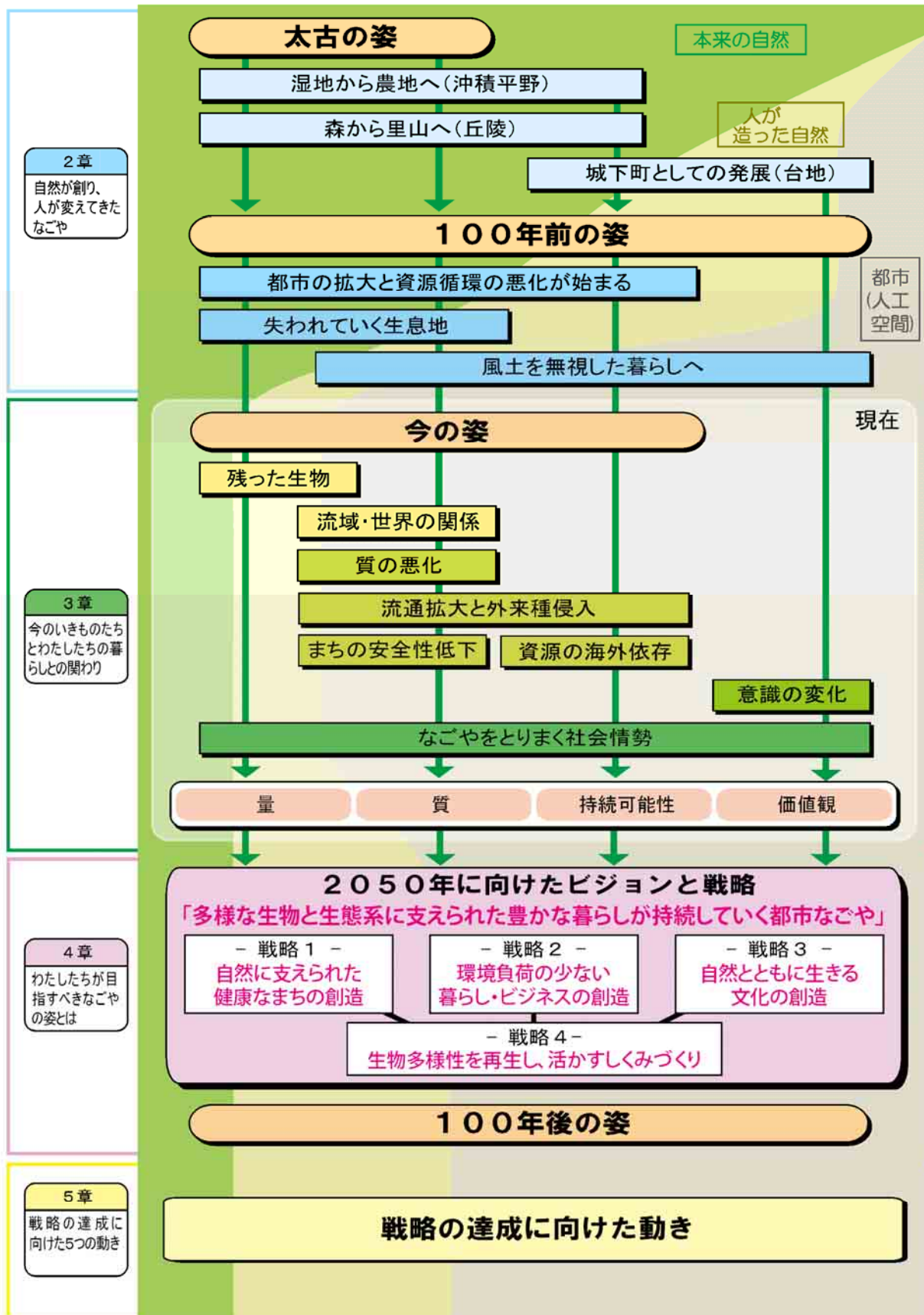
戦略策定会議 (H21.3)



しみん検討会議 (H21.8)

(3) 戦略の全体構成

- ・「生物多様性なごや戦略」の構成は、下の図に示すとおりです。
- ・近代化の過程で失われてきたなごやの生物多様性を、3つの戦略により再生していきます。



※ベースの色分けは「本来の自然」、「人が造った自然」、「都市（人工空間）」の面積的な変化をあらわしています。

- ・「生物多様なごや戦略」では、なごやの歴史を振り返りながら（2・3章）、実現可能な未来像を描き（4章）、それに向けた具体的な取り組みを示します（5章）。

- ・隆起と浸食と堆積が3つの地形を創った
- ・地形や気候からなごやの環境の基礎が築かれる
- ・3つの地形と水が生きものを育む

- ・総論：3つの地形の特性を活かした人の暮らしの広がり
- ・湿地だった西部は、田んぼや畑として利用された
- ・森だった東部は、雑木林とため池の里山として利用された
- ・台地の上には、城下町が発達して文化が育まれた

- ・100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていた

- ・都市区域の拡大と資源循環の崩壊を招く、近代的インフラ整備の始まり
- ・自然の摂理を超えた市街化により、失われていく生息地
- ・資源循環の崩壊が進み、風土を無視した暮らしへ

2章

自然が削り、
人が変えてきた
なごや

- ・今も残る生息地には、まだ生きものたちが暮らしている
- ・今の3つの大地で、生きものたちはどうやって暮らしているのか
- ・今も残る生育空間は流域や世界ともつながっている

- ・人に都合のいいまちのづくりは、生きものにとって暮らしにくい
- ・流通網の拡大が、本来そこにいないはずの生きものを運ぶ
- ・世界の生物多様性に影響を与えているわたしたちの暮らし
- ・生物多様性に守られているわたしたちの暮らし

- ・生きものから感じる心の豊かさを失っていませんか？

- ・21世紀は着実に環境重視の社会にシフトしています
- ・なごやの歴史と現状から、あなたは何を感じましたか？

3章

今のいきものたち
とわたしたちの暮らしとの関わり

- ・「環境の世紀」の折り返しにあたる2050年に向けた戦略を立てました

4章

わたしたちが目
指すべきなごや
の姿とは

- ・みんなで描こう！100年後のなごや

- ・健康なまちづくりにつながる動き
- ・暮らしやビジネスの変化につながる動き
- ・新しい担い手や地域づくりにつながる動き
- ・しくみづくりにつながる動き
- ・横断的な取り組みに向けて

5章

戦略の達成に
向けた5つの動き

生物多様性

- 生物多様性とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのことです
- 地球上には、森、里、川、海などさまざまなタイプの自然があります
- その中に、3,000万種ともいわれる多様な個性をもつ生きものがいます
- 生きものは、お互いにつながりあい、支えあって生きています
- わたしたち人間もそのつながりの一部です
- 大気と水、食料や木材など、生物多様性のたくさんの恵みが、わたしたち人間の「いのち」と「暮らし」を支えています

3つの多様性

① 生態系の多様性



- 森林、里地里山、河川、湿原、干潟、サンゴ礁など、いろいろな自然があり、そこにはさまざまな生態系があります。
- 生態系の多様性は、種の多様性の源です。

② 種（種間）の多様性



- 微生物から動植物にいたるまで、いろいろな生きものがいます。
- 種がひとつ欠けても、生態系全体のバランスが崩れる可能性があります。

③ 遺伝子の多様性



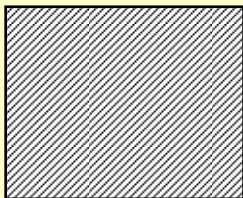
- 同じ種の中でも異なる遺伝子を持つことにより、形や模様、生態などの特徴が異なります。
- 同じ種のなかにも多様性を持つことで、種が環境の変化などに対応できる可能性が高まります。

それぞれの地域で、その土地の歴史につちかわれた多様性やその場所に特有の生物の種類・個性・生態系を大切にすることが、生物多様性の維持につながります。

生物多様性の恵み (生態系サービス)

- わたしたちは、食糧や燃料の供給をはじめ、様々なかたちで自然の恵みに依存しています。こうした自然の恵みを、生態系サービスと呼んでいます。
- わたしたちが日々あたりまえと思っていることがら、たとえば空気や水の浄化、気候や洪水の調節などの多くが、生物多様性のもたらす恵み（生態系サービス）の上に成り立っています。

【生きものが支える大気と水】



雲、空気、植物、森や
湿原などのつながりが
すべて生命の基盤

植物が酸素を生み出し、森林が水循環のバランスを整えるなど、生きもののいとなみによって、われわれ人間を含むすべての生命の生存基盤である地球環境が保たれています。

【暮らしの基礎】



米は大地からの贈り物

毎日の食卓をかざる米や野菜や魚等は、野生生物を改良あるいは直接利用します。新聞や本などの紙製品は植物から作られます。さまざまな医薬品も生物のあたら気を利用して開発されます。

【生きものと文化の多様性】



地域の食材が織りなす
食文化も多様

南北に長い国土を有し、季節の変化に富み、地域ごとに多様な動植物が見られる日本の自然。こうした自然と一体となって、日本の地域色豊かな伝統文化が育まれてきました。

【自然に守られるわたしたちの暮らし】



奥山の上流域に支えら
れるなごやの暮らし

森林や河川湖沼の保全是、生きものを守るとともに、安全な飲み水の確保や、山地災害の軽減、土壌の流出防止など、安心できる居住環境の確保につながります。

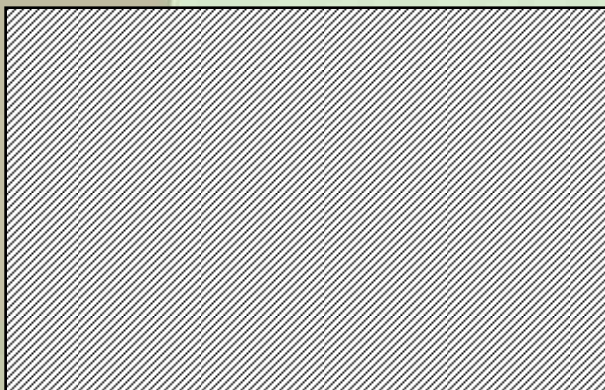
第2章

自然が創り、 人が造ったなごや

歴史編

— 自然が創り、人が変えてきたなごや —

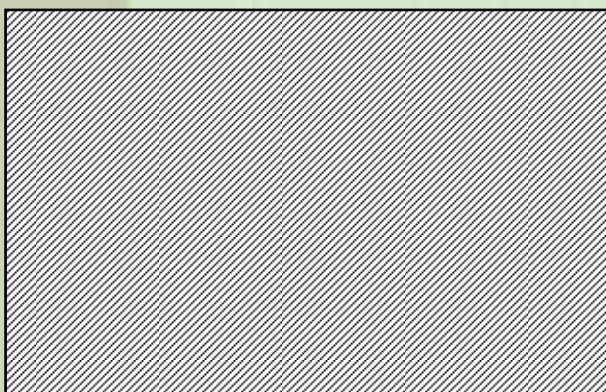
猪子石の丘陵地（宮根の山）
（千種区千代が丘付近：昭和35年）



（千種区宮根台：平成21年）



名東区上社周辺の田園風景
（神蔵寺から北東方向：昭和35年）



（神蔵寺から北東方向：平成21年）



(1) 自然の摂理が創った大地と生きもの

— 自然の摂理がなごやの大地を創り、生きものを育んだ —

生きものを育む基礎となるのが、地形と水です。

自然の力が創り上げた、なごやの地形と水の違いは、そこにそれぞれ違った生きものたちを育みました。

なごやの鳥瞰図



出典：新修名古屋市史 資料編 自然（名古屋市 平成20年）

備考：数字は標高値m

① 地球の変動が創った3つの地形

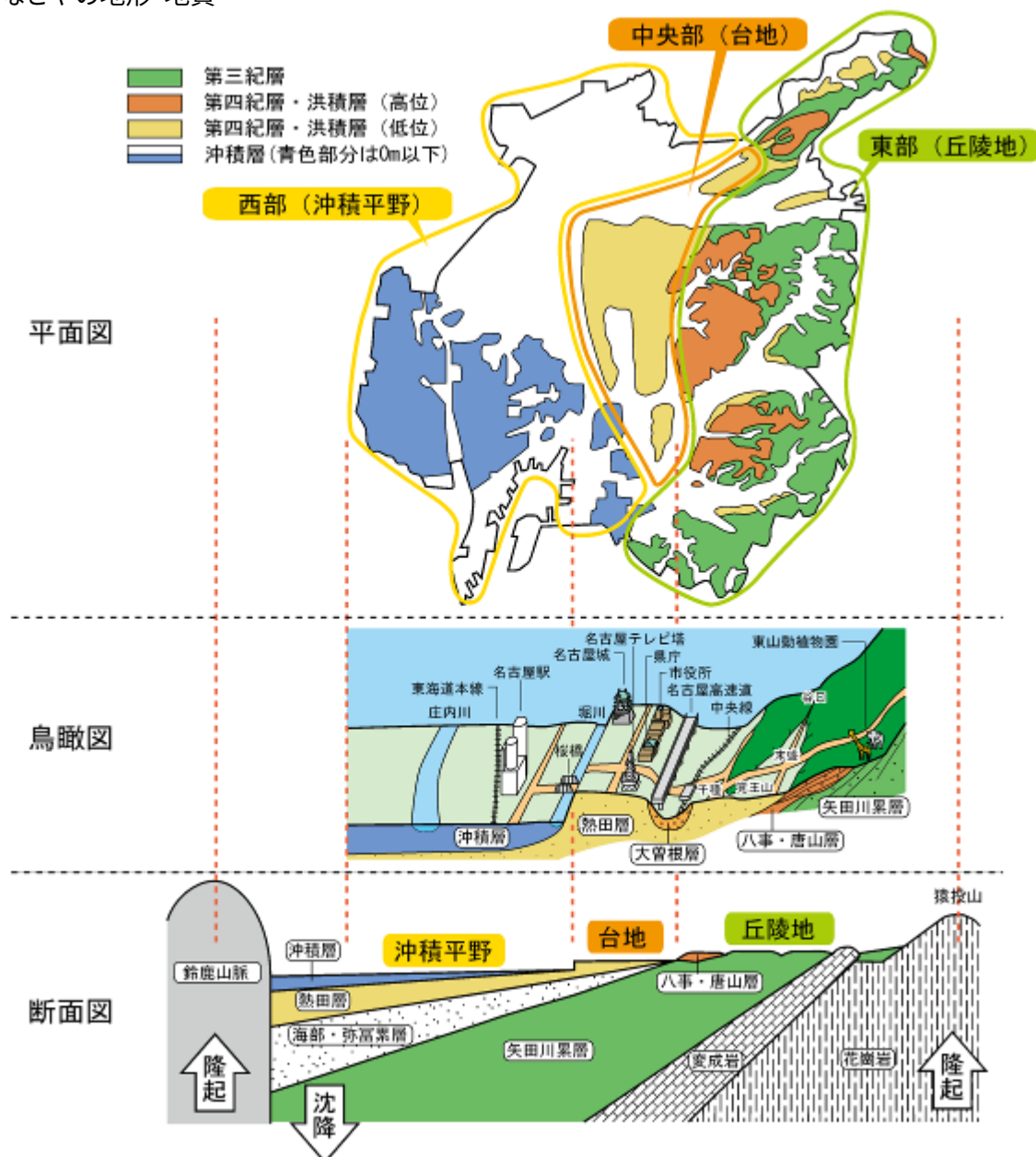
— 隆起と浸食と堆積が3つの地形を創った —

- 地形は、生態系を支える土台です。
- 地層はできた年代やそのでき方で、それぞれ性質が違ってきます。
- なごやの大地の成り立ちから、西部・中央部・東部の土地の違いを見てみましょう。

なごやの地形

- ・なごやの地形は、大きく3つ(西部の沖積平野、中央部の台地、東部の丘陵地)にわけられます。
- ・これは、人類が誕生するはるか昔から続く、地形の形成運動によるものです。

なごやの地形・地質

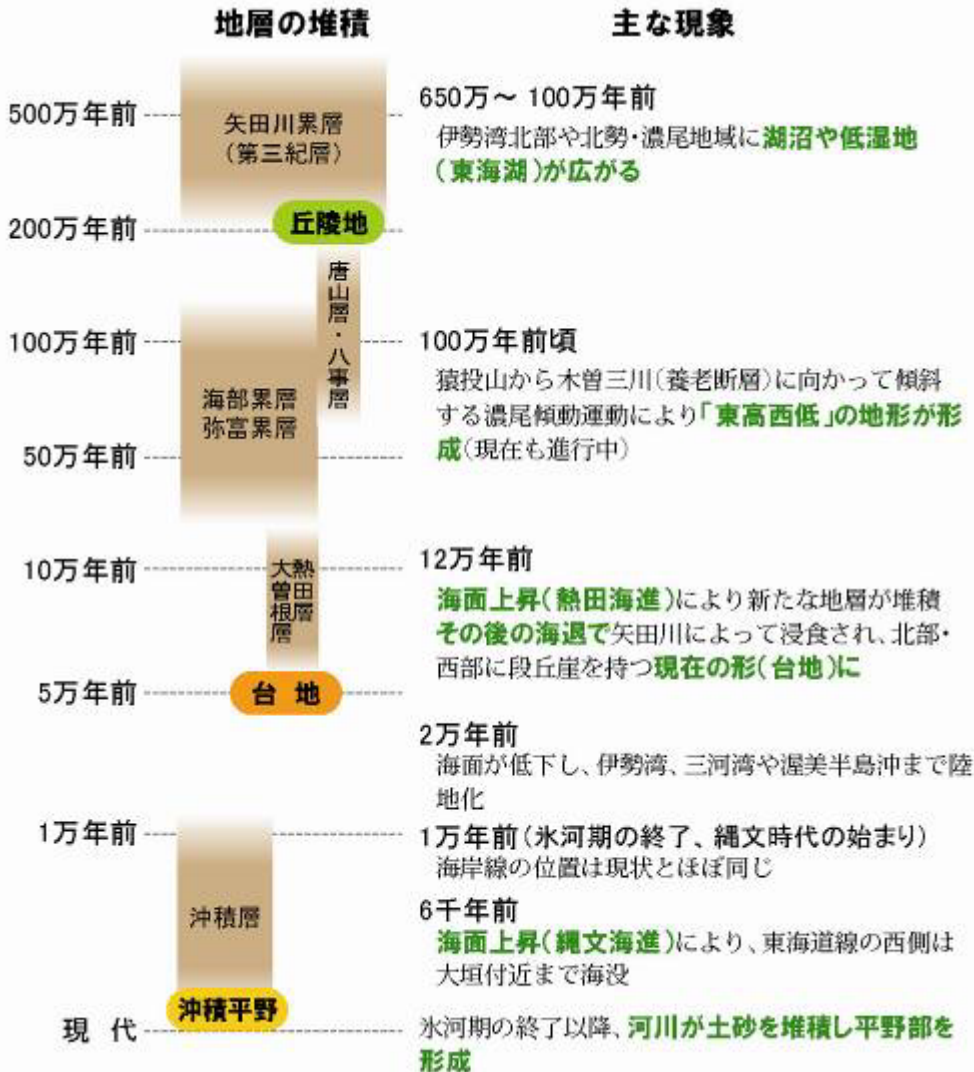


出典: なごや環境ハンドブック-下巻(「なごや環境大学」実行委員会 平成20年)、名古屋の大地とその生い立ち-見てみよう、調べてみよう、郷土の地質遺産(村松憲一 2007年)より作成

(1) 自然の摂理が創った大地と生きもの

なごやの地形ができるまで

なごやの地形の変遷



<現在>



出典:新修名古屋市史第8巻、日曜地学・東海の自然をたずねて(東海化石研究会)より作成

- なごやの地形は、長い年月をかけ、隆起や侵食・堆積などの作用を受けて創られました。
- その成り立ちの違いは、それぞれの土地の「起伏」・「質」・「水はけ」などの違いを生んでいます。
- 濃尾平野は、地表面も地下の地層も西に傾いています。それは濃尾傾動運動という大地の上昇・沈降運動によるものです。これは100万年ほど前から始まり、現在まで続いています。
- まず、かつての東海湖に堆積した地層が隆起し、東部の丘陵地帯となりました。その後、上昇した海の底に堆積した地層が、海面の低下で地上に現れ、中央部の台地を創りました。そして、低くなった西側には河川が流れ、その堆積物によって平野ができました。

② 環境からみえるなごやの固有性

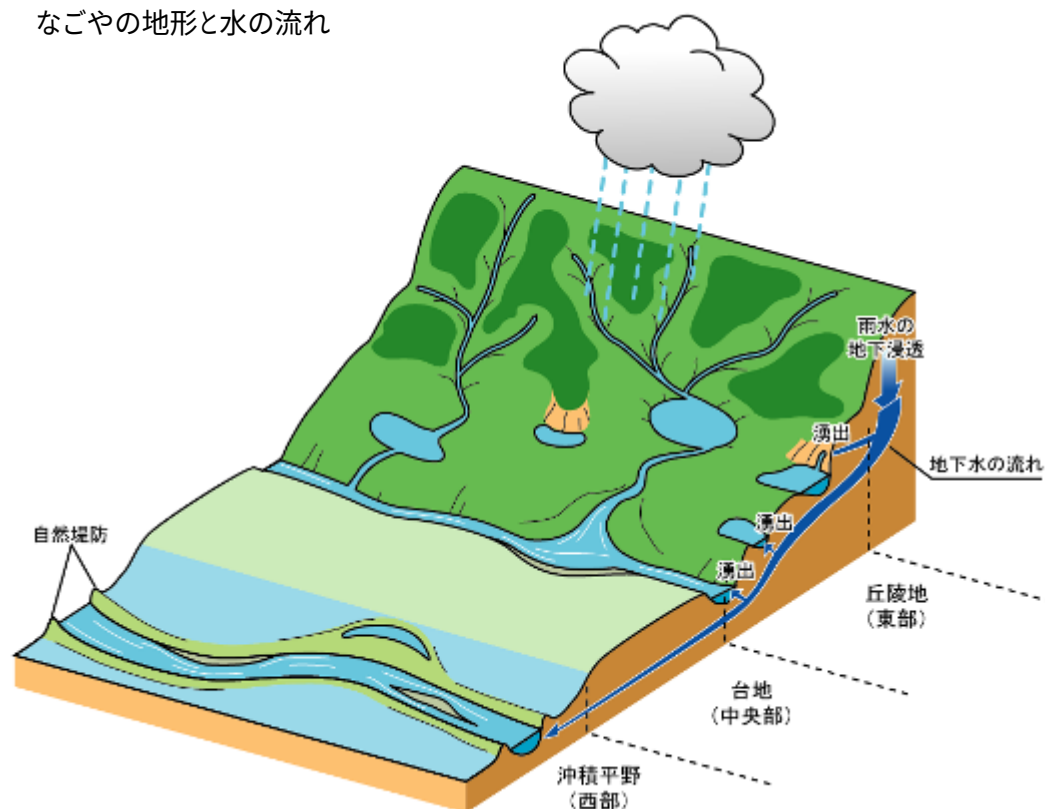
— 地形や気候からなごやの自然環境の基盤が築かれる —

- 地形や気候は、その土地のもつ固有性（潜在能力）を示す基盤です。
- なごやの自然環境の基盤がどのようなものか見てみましょう。

なごやの自然環境の基盤

- ・東部の丘陵地に降った雨の一部は、大地にしみ込み、地下水となります。
- ・地下水は、丘陵地の崖地で湧出し湿地を形成し、河川や西部の低地で湧出していました。
- ・西部は河川の下流域に位置し、洪水時に氾濫しやすい地域（氾濫原）になっていました

なごやの地形と水の流れ



伊吹おろし

「おろし」は西高東低の冬型気圧配置のとき、山から吹き下りてくる風をいいます。なごやが位置する濃尾平野では「伊吹おろし」と呼ばれる北西風です。

伊吹おろしは1月下旬から3月にかけて吹く日数が多くなり、特に強く吹くのは3月で、3月はなごやで最も強風が吹きやすい月でもあります。

伊吹おろしは熱田台地に突きあたり、それを乗り越えて下ってきます。昭和区御器所近辺や千種区には「吹上」という字名があり、台地を下った伊吹おろしが吹き上げてくることにちなんだ地名とされています。

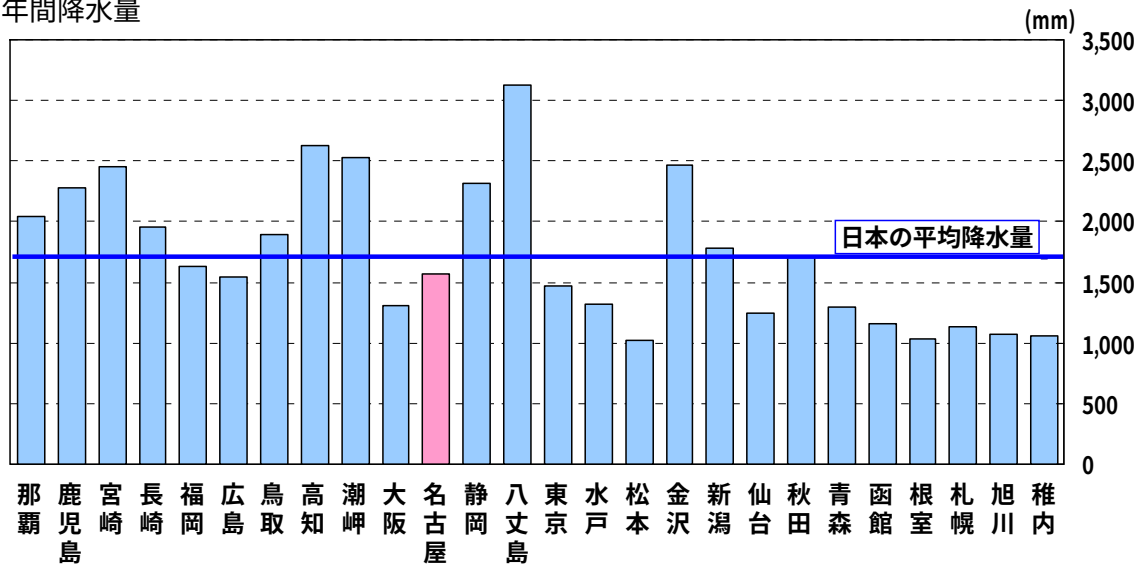


(1) 自然の摂理が創った大地と生きもの

なごやの気候

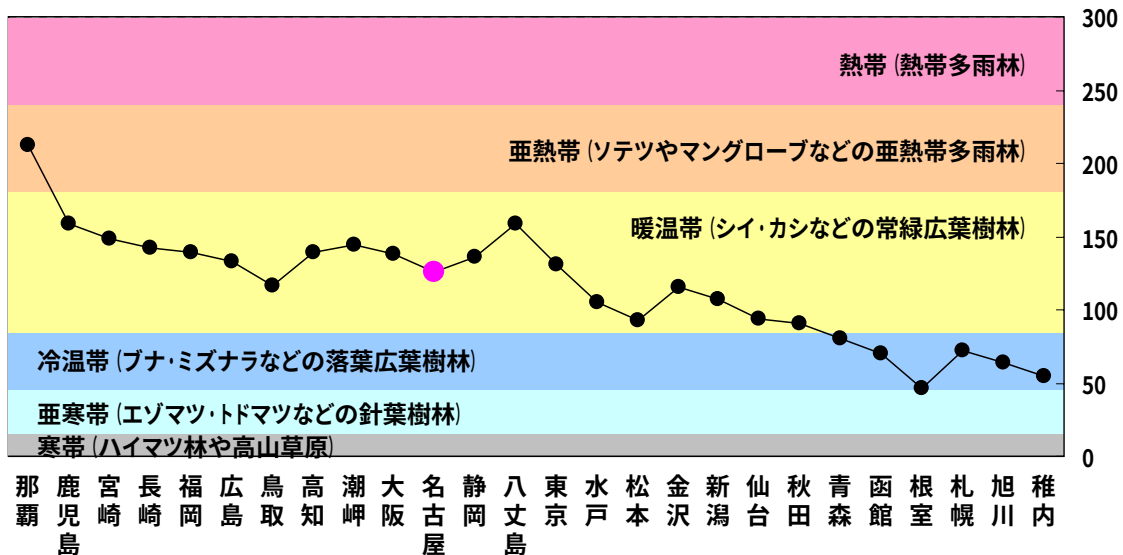
- ・なごやの降水量は、日本全国平均よりもやや少ない程度です。
- ・日本には、亜寒帯から亜熱帯の気候とそれに対応した植生が分布していますが、なごやは暖温帯に位置し、シイ・カシなどの常緑広葉樹林が形成されます。

年間降水量



備考：1971年～2000年の平年値

暖かさの指数と気候帯



備考：暖かさの指数とは、平均気温が5°C以上の月の平均気温から5°Cを引いた値を1年間積算したもの

- なごやの気候は、森林が生育するのに十分な降水量です。
- 地形と水の流れによって、なごやの生きものが育まれる基盤が創られていきました。

③ 人の手が入る前のなごやの生きもの

— 地形と水が生きものを育む —

- 太古のなごやでは、自然が創った地形と水に応じた生態系が育まれていました。
- 人の手がほとんど入っていなかった時代の、なごやの生きもの達の姿を想像してみましょう。

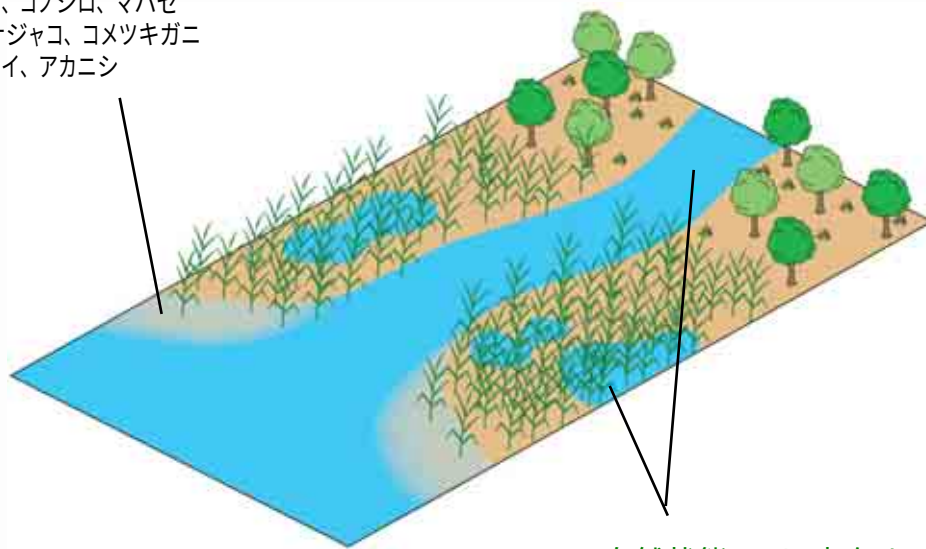
太古のなごや (自然環境に人の手がほとんど入っていなかった時代。おおむね弥生時代前期頃)

西部 (沖積平野)

西部の海岸には干潟や砂浜が広がり、甲殻類や貝類、それを餌にする鳥類などが生息・利用していたと考えられます。水辺にはヨシ原が広がり、池や沼も点在していたでしょう。

自然海岸に広がる干潟や砂浜

植物：ハマボウ、シバナ、アマモ
鳥類：ミサゴ、マナヅル、シロチドリ
魚類：スズキ、コノシロ、マハゼ
甲殻類：アナジャコ、コメツキガニ
貝類：バイガイ、アカニシ



自然状態の川、点在する池や沼

植物：ヨシ、マコモ、ヤナギ類
哺乳類：ニホンカワウソ、カヤネズミ
鳥類：チュウビ、チュウサギ
両生類：ナゴヤダルマガエル、アカハライモリ
魚類：イチモンジタナゴ、イタセンパラ
甲殻類：ヤマトヌマエビ
昆虫類：タガメ
貝類：ヤマトシジミ

(1) 自然の摂理が創った大地と生きもの

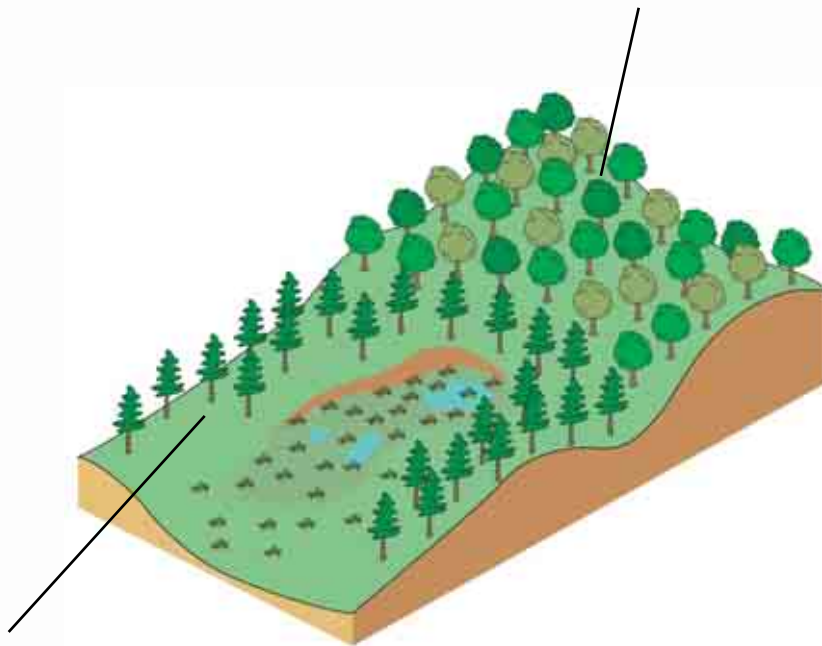
中央部や東部 (丘陵地)

東部では、土壌が発達したところに常緑広葉樹の森があり、丘陵地の尾根部など貧栄養の環境には、アカマツのまばらな林があったと考えられます。崖下などには湧水湿地があり、その環境に適応した植物が生育していたでしょう。

常緑広葉樹の森

植物：シイ類、カン類 (土壌が発達した山地部)

哺乳類：ツキノワグマ、ニホンカモシカ、イノシシ、ニホンオオカミ、ムササビ



ひらけたアカマツ林

植物：アカマツ (丘陵地尾根部)、フモトミズナラ、シデコブシ、シラタマホシクサ

鳥類：ハヤブサ、オオタカ

両生類：カスミサンショウウオ

昆虫類：ムラサキシジミ、ヒメタイコウチ、ギフチョウ

資料：安田喜憲、環境考古学事始、洋泉社MC新書、2007

安田喜憲、森の日本文化、新思索社、1996

自然史編纂調査会、東海の自然史、財団法人東海財団、1990
新修名古屋市史第8巻

- 西部には、湿地や干潟を中心とする水辺の生態系が形成されていたでしょう。
- 東部の丘陵地には、シイやカシなどの常緑広葉樹の森が広がり、崖下には冷涼な湧き水による小さな湿地があり、シデコブシやシラタマホシクサなど氷河期以後もこの地域で生きのびた植物がみられたでしょう。
- 今でも、中央部の熱田神宮や東部の湿地には、太古の時代の自然の姿がわずかに残されています。

地形の変動と植物～東海丘陵要素の植物～

「東海丘陵要素」とは？

東海地方の丘陵や台地の低湿地とその周辺に固有（世界でこの地域にのみ生育）、あるいは日本での分布の中心がある植物の総称です。

15種類の植物が東海丘陵要素と呼ばれています。

シデコブシ、マメナシ、ヘビノボラズ、ミズナラ近似種、ヒトツバタゴ、クロミノニシゴリ、ナガボナツハゼ、ハナノキ、ナガバノイシモチソウ、トウカイコモウセンゴケ、ヒメミミカキグサ、ミカワシオガマ、ミカワバイケイソウ、シラタマホシクサ、ウンヌケ

「東海丘陵要素」と「砂礫層」

一般的に、植物群（植生）は、気温や降水量など「気候」を要因として存在していますが、東海丘陵要素の植物は、数百万年に渡って「砂礫層」が地表面に堆積していることが深く関わっています。

他の植物が生育しにくい環境

東海丘陵要素の植物は、他の植物が生育しにくい厳しい環境に見られます。

- ・崩れやすい地盤
- ・地表面には栄養分のある土壌層がなく、栄養分の少ない砂礫層
- ・湿地をつくる地下水（湧水）は、砂礫層を通過してきたため栄養分が少なく、比較的低温

このような環境で生育できるよう適応してきた種や、他の植物と競合しないことで残存してきた種が東海丘陵要素の植物になりました。

シラタマホシクサ



砂礫層の形成には、第四紀を通じて「濃尾傾動運動」という大規模な地殻変動が続いたことが関係しています。地殻変動が常に山を押し上げ続けたため、普通は途絶える砂礫の供給が長期間続き、現在まで残る層が形成されました。

シデコブシ



東海丘陵要素の植物群は、厳しい環境にそれぞれの方法で適応し生育しつづけてきた、数少ない大切な植物たちです。

(2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

— 風土に合わせて広がった人の暮らしが、生きものを変えていく —

自然が創った3つの地形の違いを上手く利用しながら、自然に合わせた人の暮らしが広がっていきました。

尾張名所図会

富士見原



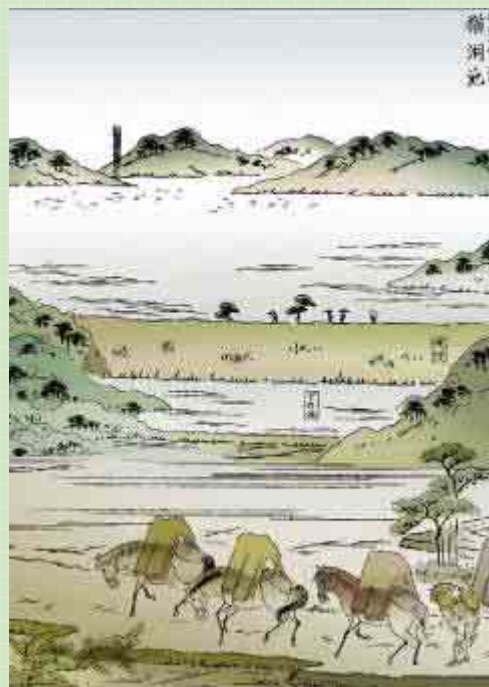
塚田神社



有松絞店



猫洞池



山吹谷



山吹谷

① 3つの地形に人が広がる

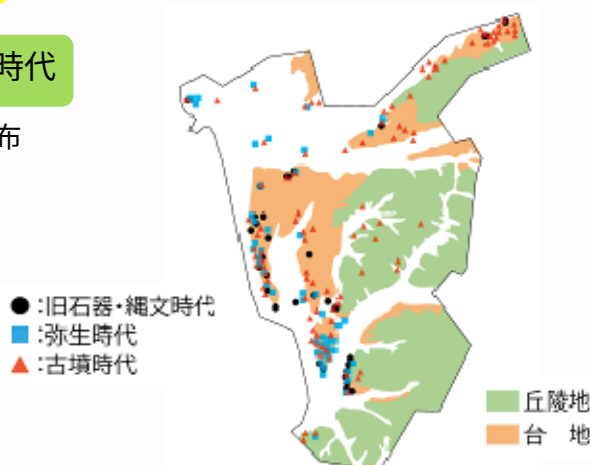
— 総論：3つの地形の特性を活かした人の暮らしの広がり —

- 今のなごやの自然や生きものは、人の手が加わって形成されたものです。
- 生活圏の拡大とともに、必要な生物資源も増えました。
- ここでは、その過程を見ていきましょう。

人の広がり

縄文～古墳時代

遺跡の分布

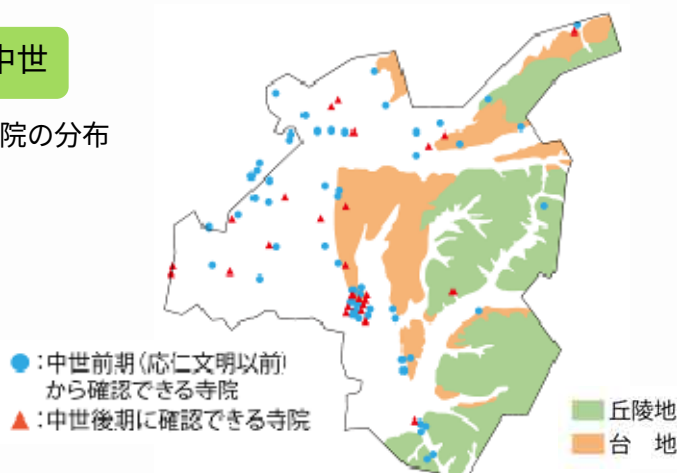


出典：新修名古屋市史 資料編 考古1（名古屋市 平成20年）より作成

- ・縄文時代には、台地上に集落が形成されました。
- ・弥生時代には、氾濫原低地への進出が始まりました。
- ・古墳時代には東部の丘陵地への進出が始まりました。

古代中世

寺院の分布

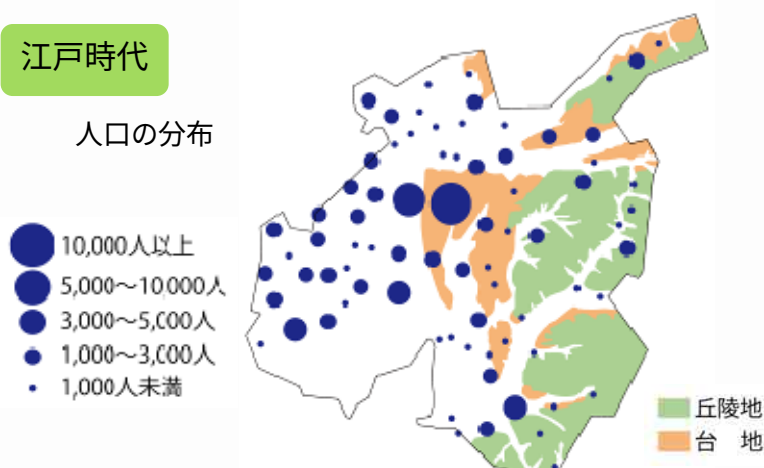


出典：新修名古屋市史第2巻（名古屋市 平成10年）

- ・中央部の台地は、熱田神宮を中心に栄えました。
- ・西部の沖積平野全体に人々の暮らしは広がっていきました。
- ・東部の丘陵地は、里山として利用されていきます。

江戸時代

人口の分布



出典：新修名古屋市史第2巻（名古屋市 平成10年）より作成

- ・中央部の台地は、名古屋城の城下町として、発達していきました。
- ・西部の沖積平野や東部の丘陵地は、主に農地として開発が進められていきました。

(2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

なごやのまちができるまで (徐々に進んだ自然の改変)

	西部 (沖積平野)	中央部 (台地)	東部 (丘陵地)
縄文時代	・ 浅海や低湿地に土砂が堆積 → 沖積平野を形成	・ 台地上に集落形成	
弥生時代	・ 沖積平野に集落形成が始まる → 低湿地開発の始まり		
古墳時代			・ 丘陵地への進出始まる ・ 陶器生産の開始 → 森林伐採の始まり
古代中世	・ 沖積平野の各所に荘園形成 ・ 洪水の頻発 (11～12世紀) ← → 河道の活発化 → 自然堤防の発達		・ 陶器生産は奥地に展開 → 未開の山林の「里山」化 森林伐採の拡大
江戸時代	・ 庄内川の洪水頻発 ← → 河川改修 ・ 河口での土砂堆積 ← → 干拓による新田開発	・ 「城下町」の形成	・ 里山のアカマツ疎林化 (伐採→二次林化と疎林化) ・ ため池の創出 → ため池によるかんがい
明治中期	・ 後背湿地・・・水田 自然堤防・・・集落、畑	・ 名古屋台地・熱田台地・・・市街地 御器所台地・・・畑 谷底平野・・・水田	・ 東部丘陵・・・松林

P29～30参照

※図中矢印は、人の増加・拡散状況を示す

- 自然の改変は、ヒトの登場と共に始まりました。
- 3つの地形や水の流れの違いを上手く利用しながら、人の生活圏が拡大していきます。
- 森林の木材を利用しながら、干拓やため池灌漑で農地を拡大し、増加する人口を支えました。
- 市場には様々な魚や野菜が流通し、十分な食糧生産がありました。

② 西部には田んぼや畑が広がる

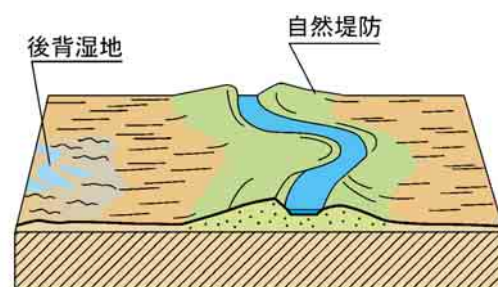
— 湿地だった西部は、田んぼや畑として利用された —

- 西部に広がる低湿地は、豊富な水を利用して、農地として使われました。
- ここでは米や野菜が生産されていました。

西部の地形を活かした人の暮らし

- ・上流から運ばれてきた土砂は、川の両わきに堆積して「自然堤防」をつくります。
- ・川から離れた場所は河床よりも低くなり、「後背湿地」とよばれる湿地になります。
- ・鎌倉時代の荘園（富田荘）をみると、地形を活かした暮らしが営まれていたようすをうかがうことができます。

富田荘古図と微地形分類図を見比べると、例えば成願寺とその周辺の建物は、周囲よりも地盤の高い自然堤防上に形成されていたことが推測されます。



富田荘古図

鎌倉時代～南北朝時代に、現在の名古屋市市中川区富田町を中心に存在していた広大な荘園



出典：新修名古屋市史第1巻（名古屋市 平成9年）より作成

富田荘周辺の微地形分類図



出典：安田喜憲 尾張国富田庄の歴史地理学的研究,立命館文学303,1970 より作成

③ 東部には里山が造られる

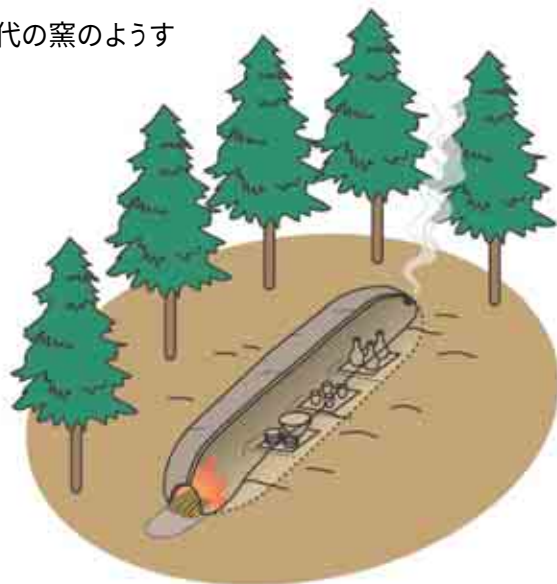
— 森だった東部は、雑木林とため池の里山として利用された —

- 東部の丘陵では、河川から水を引くことが難しいため、ため池灌漑が進められました。
- 森林に継続的に人手が加わり、「里山」が形成されていきました。

森林資源利用のはじまり

古墳時代の窯のようす

- ・古墳時代になると、東部の丘陵地では陶器生産が始まりました。
- ・縄文土器・弥生土器は、焚き火で焼かれましたが、古墳時代の土器は、山の斜面を掘ってつくる「あな窯」で焼かれました。
- ・窯の出現によって、燃料の薪がたくさん必要になり、これまで以上に樹木が伐採されるようになりました。



出典：おもしろやきもの展ハンドブック（名古屋市博物館）、里山の生態学（広木詔三）

江戸時代における森林伐採

- ・江戸時代の絵図をみると、寺のまわりや池の背後の丘陵地にマツがまばらに描かれています。
- ・マツは伐採した跡地に最初に生える樹木なので、この図から、広い範囲で森林が伐採されたようすをうかがうことができます。

1840年ごろの名東区蓮教寺、牧の大池

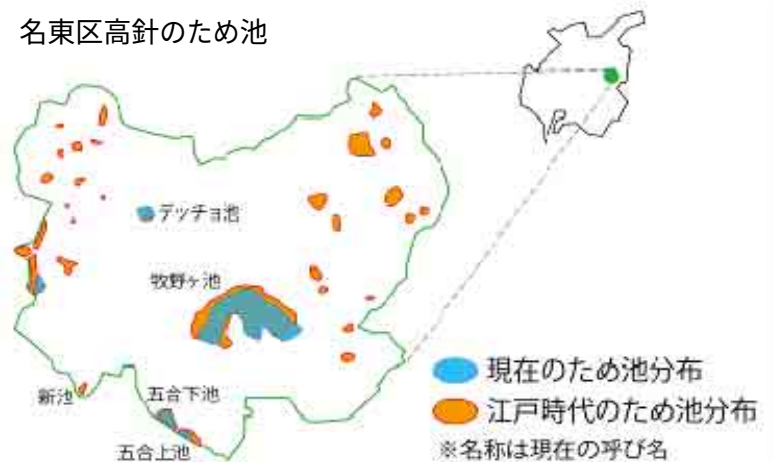


(2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

丘陵地のため池

- ・東部の丘陵地では、農業用水が不足するため、多くのため池がつくられました。
- ・現在の名東区高針は、むかし高墾とよばれ、36のため池があったとされています。「高」「墾」という漢字から、「開墾した高い場所」であったことがわかります。

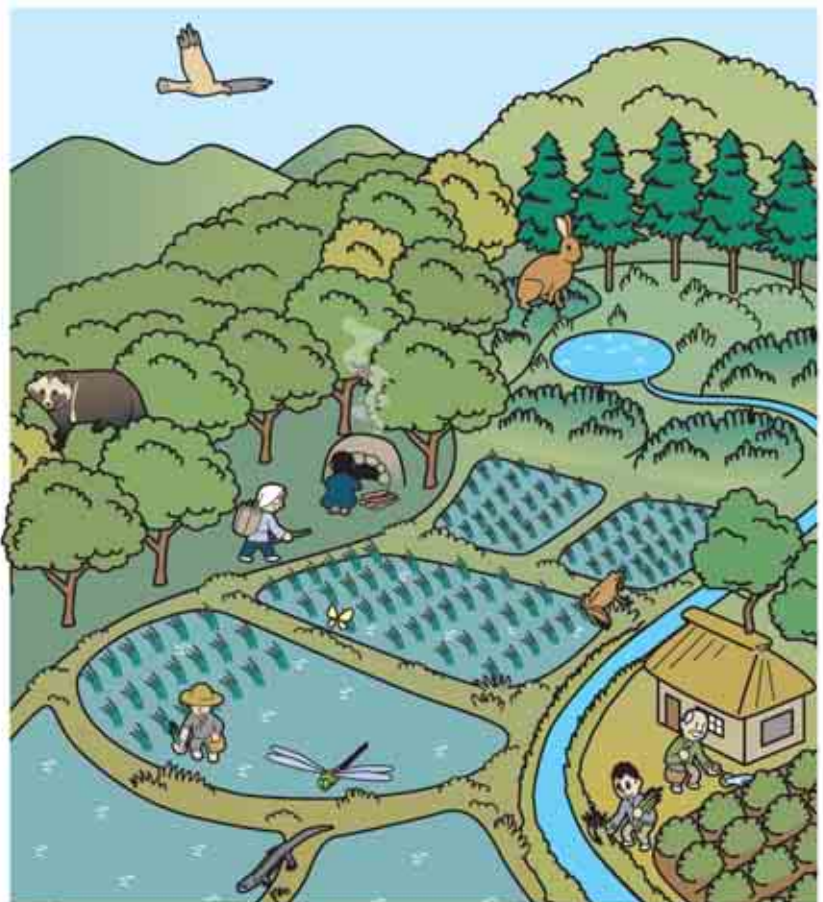
名東区高針のため池



出典：新修名古屋市史第4巻（名古屋市 平成11年）より作成

里山の生活

- ・江戸時代の里山の想像図です。
- ・里山では、農地とため池、林がセットになっていました。
- ・これらの環境は、多くの生きもののすみかになっていました。



- 丘陵地に暮らす人々は、水を確保するためにため池を造り、稲作や畑作を行っていました。
- 森の樹木や草は燃料や肥料として使われ、次第に雑木林となりました。
- こうして、農地とため池、樹林地で構成される「里山」の暮らしが営まれていました。

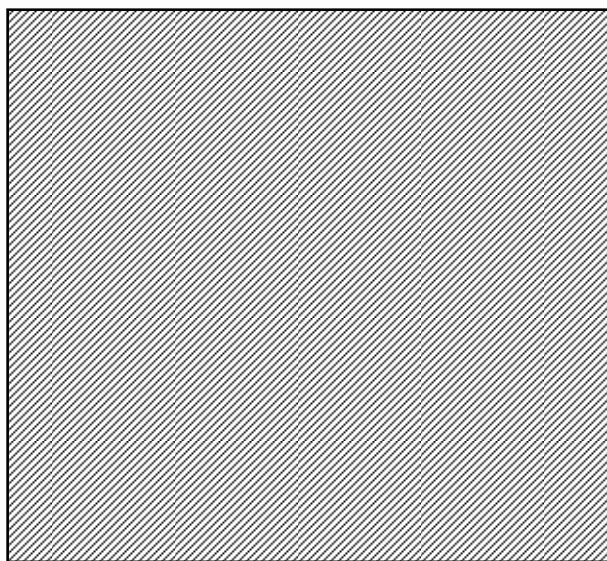
④ 中央部には町が発達する

— 台地の上には、城下町が発達して文化が育まれた —

- 中央部に広がるなだらかな高台には、古くから集落が発達していました。
- そして、名古屋城の築城により、城下町が築かれたことで、消費と文化の中心地となりました。

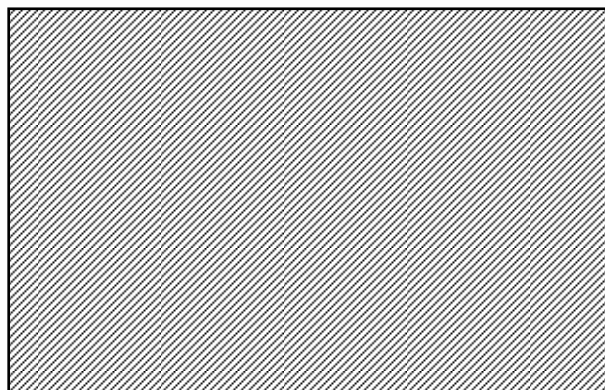
城下町の形成

名古屋城周辺

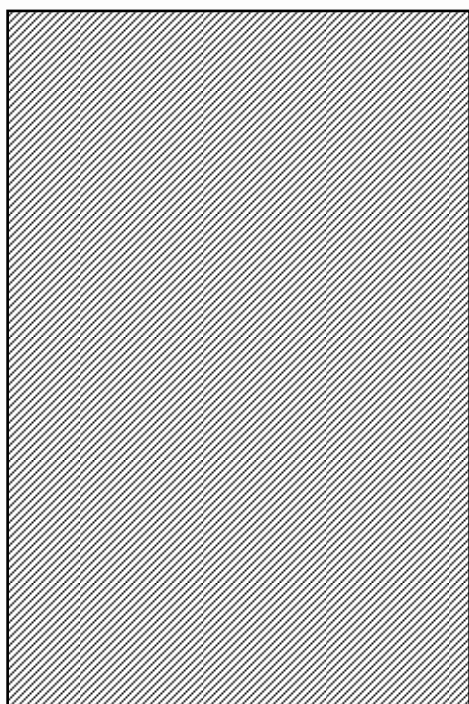


・400年前、中央部の台地には、清須越によって、名古屋城を中心とする都市がつけられました。

熱田神宮周辺



城下町を支えた食の供給



・熱田には魚市場、下小田井（現清須市）には青物市場がありました。

・下小田井には、西部だけでなく、尾張全域から野菜が集まっていました。関東や四国から届くものもあったそうです。

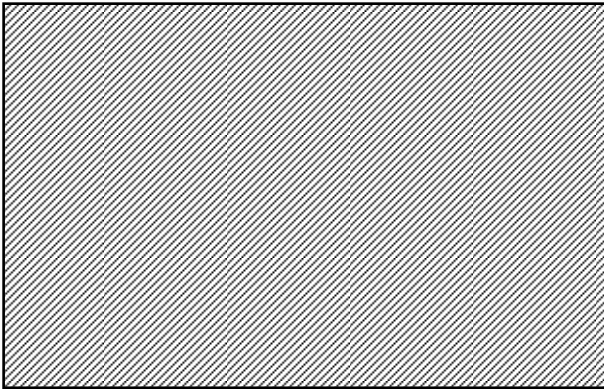
出典：図説 名古屋圏—その構造と問題—（名古屋都市圏研究会編 1993年）より作成

(2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

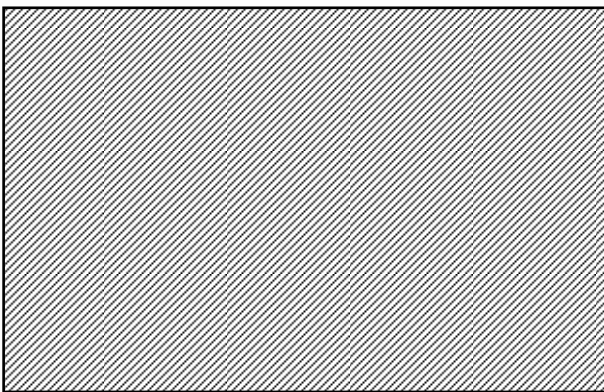
城下町を支えた木材の供給

・熱田区白鳥には大きな貯木場があり、木曽で切られた木材は、いったん木曽川をくだり伊勢湾まで運んだ後、堀川を利用して熱田に運ばれてきました。

加子母での伐採



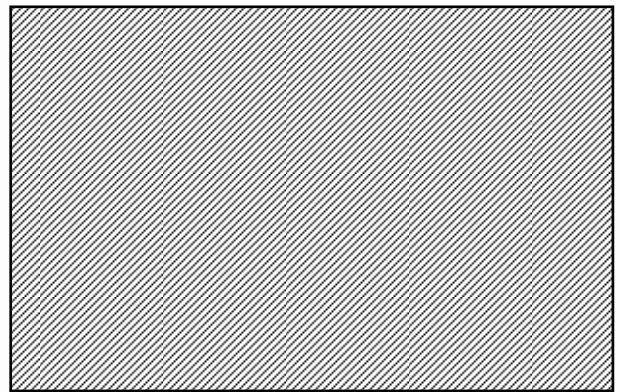
木曽川を下る木材



木材の運搬経路



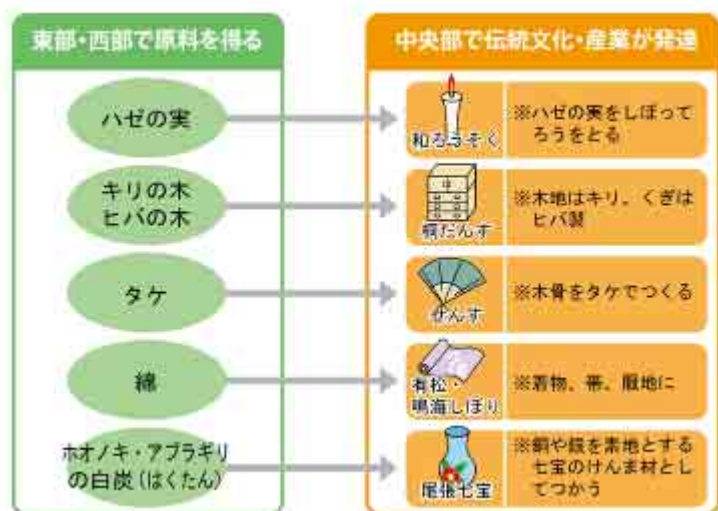
白鳥に到着した木材



伝統文化と産業

・おもに東部や西部から得られる自然資源を利用して、さまざまな伝統文化や産業が生まれました。

自然資源から生まれた伝統文化
出典：名古屋の伝統産業ホームページ、
あいちの伝統的工芸品ホームページ



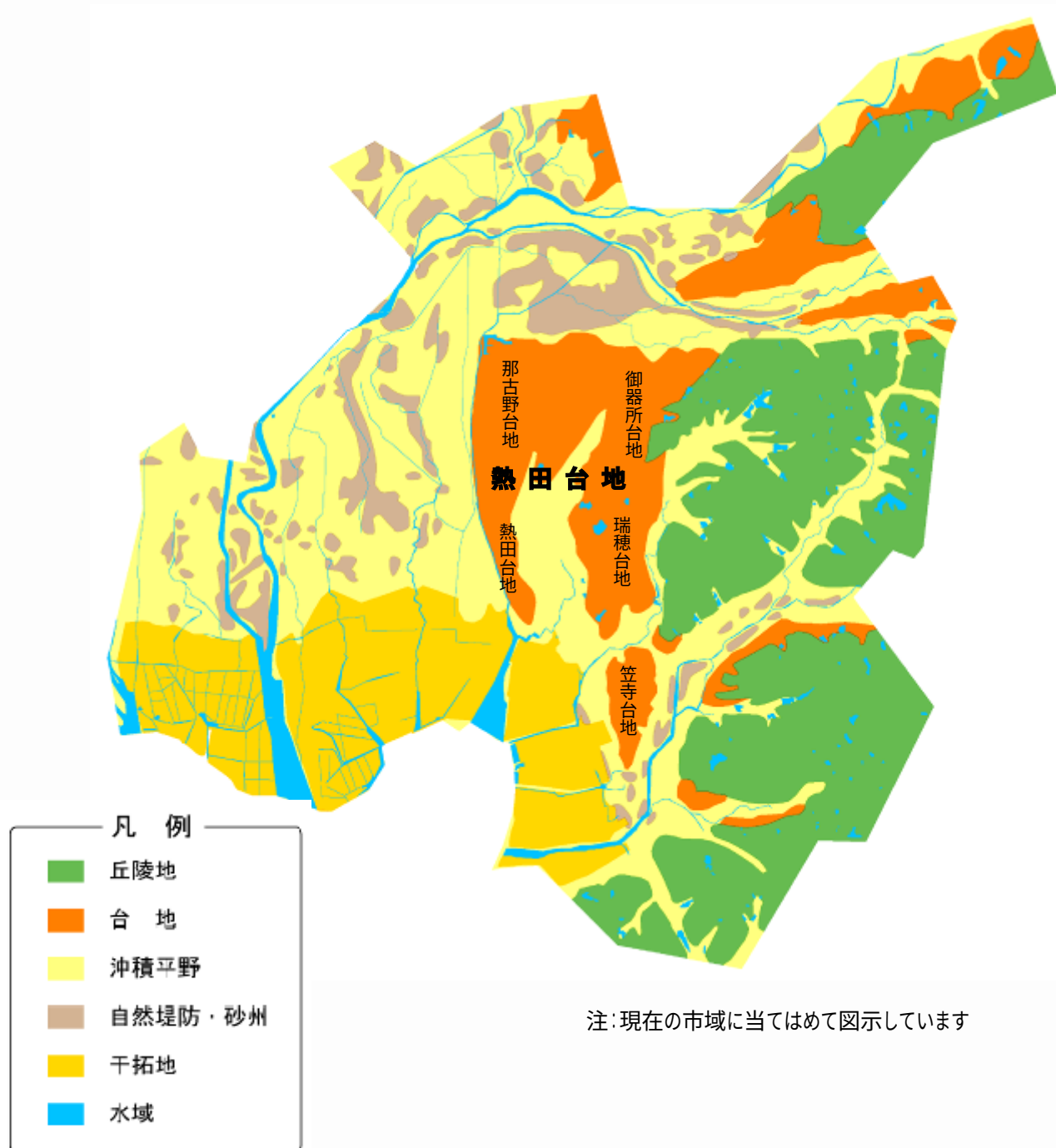
- 中央部の台地は、古くから集落が発達していました。
- そして、西部や東部の食料や資源を利用した、町の暮らしが築かれていきます。
- 名古屋城の城下町として、現在に通じる様々な伝統文化が花開きました。

⑤ 100年前のなごやの姿

— 100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていた —

- なごやの生物多様性は、人と自然が創りあげてきたものです。
- 100年前のなごやの土地利用をみてみましょう。

大きく3つに分かれる地形



注：現在の市域に当てはめて図示しています

出典：明治・昭和東海都市地図（1996年、柏書房株式会社）

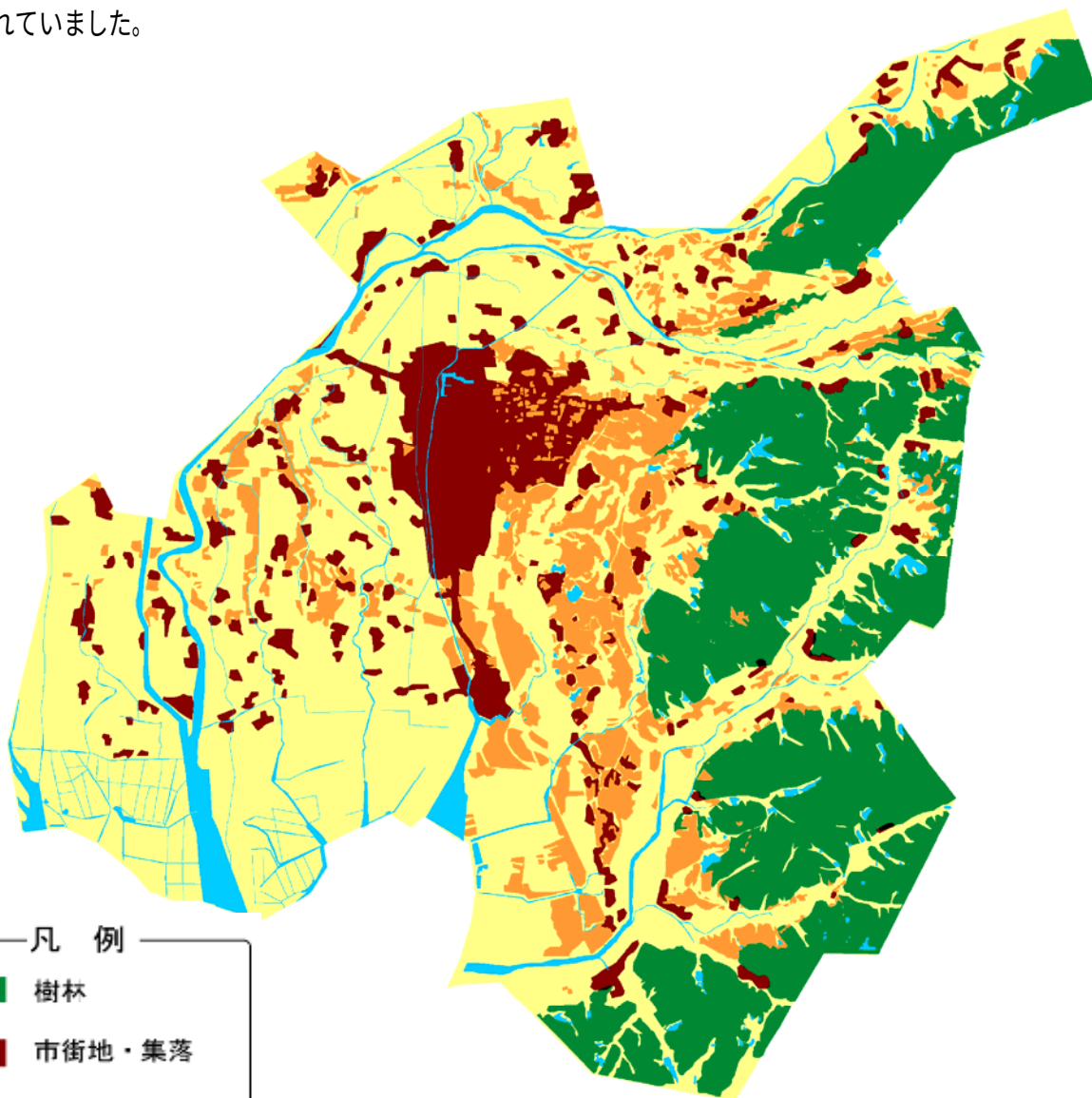
庄内川治水地形分類図（下流）改訂版（平成16年、国土交通省中部地方整備局庄内川河川事務所）

(2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

地形に合わせた土地利用

100年前の土地利用と地形を見比べると・・・

- ・西部の沖積平野では、自然堤防（微高地）は集落や畑として利用され、その他の低地は水田として利用されていました。
- ・中央部の台地では、西側（那古野台地、熱田台地）は市街地、東側（御器所台地、笠寺台地）は畑として利用されていました。
- ・東部の丘陵地では、大部分が樹林で、林縁はため池や集落として利用され、河川沿いの低地は水田として利用されていました。



凡 例

- 樹林
- 市街地・集落
- 畑
- 水田
- 水域

＜100年前の土地利用と地形＞

地域	西部			中央部	東部
地形	沖積平野			台地	丘陵地
	氾濫原低地	自然堤防	干拓地		
土地利用	水田	畑 集落	水田、畑 集落	畑 市街地	樹林

明治・昭和東海都市地図（1996年、柏書房株式会社）より作成

100年前のなごや

西部（沖積平野）

西部の海岸近くでは低湿地が干拓され、水田開発が進みました。
水田は生きものにとって新たなすみかとなりました。

水田内に点在する島畑

用水路による取水、
河道の縮小

自然海岸の減少、干潟や砂浜の減少

鳥類：ミサゴ、ツルシギ、シロチドリ
魚類：スズキ、コノシロ、マハゼ
甲殻類：アナジャコ、コメツキガニ
貝類：バイガイ、アカニシ、ハマグリ

干拓地の創出

緑地の出現、集落の出現

植物：ススキ、イタドリ
哺乳類：イタチ、カヤネズミ
鳥類：オオタカ、オオヨシキリ
爬虫類：ヤマカガシ

池や沼の減少、湿地の水田化

植物：ヨシ、オギ、マコモ、ガマ
両生類：ナゴヤダルマガエル、アカハライモリ
魚類：メダカ
甲殻類：ヤマトヌマエビ
昆虫類：タガメ
貝類：ヤマトシジミ

中央部（台地）

中央部では、まちの近代化が始まり、鉄道や道路が敷かれ、住宅地も増加しました。

鉄道の敷設、未舗装の道路

植物：カタバミ、ススキ、ホトケノザ、ナズナ
哺乳類：クマネズミ、ドブネズミ

雑木林の縮小

植物：クロガネモチ、クスノキ、ケヤキ、ムクノキ
哺乳類：キツネ、アカネズミ、ノウサギ、アナグマ
鳥類：オオタカ

水田の点在化

植物：イネ、イヌタデ、ススキ
哺乳類：コウベモグラ、ハタネズミ
両生類：トノサマガエル
昆虫類：ゲンゴロウ、タガメ

住宅の増加

植物：カタバミ、ススキ、ホトケノザ、ナズナ
哺乳類：クマネズミ、ドブネズミ
鳥類：ツバメ
爬虫類：ヤモリ

(2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

東部 (丘陵地)

東部では、農地—ため池—樹林がセットになった「里山」が形成されていました。
人の利用・管理といきものの生活がバランスよく維持されていました。

湧水湿地

植物：シデコブシ、ハナノキ、シラタマホシクサ、ヌマガヤ
両生類：カスミサンショウウオ
昆虫類：ハッチョウトンボ、ヒメタイコウチ

樹林の里山林化

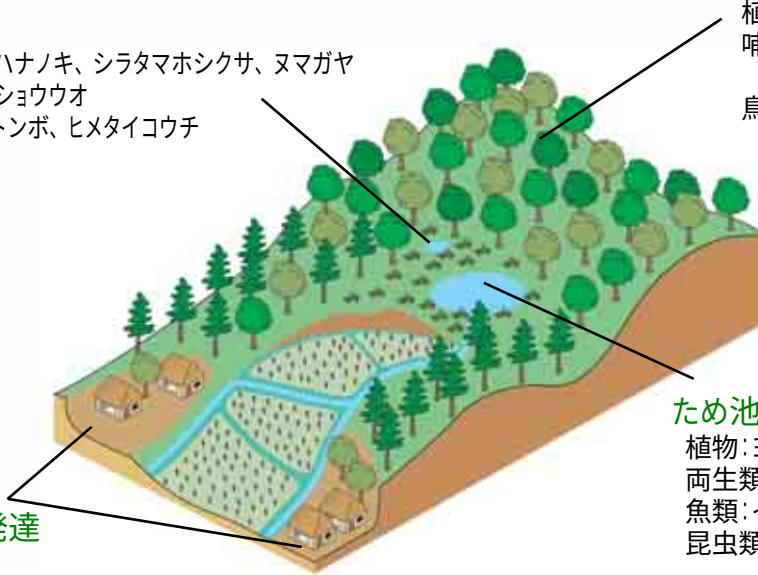
植物：コナラ、アベマキ
哺乳類：ニホンリス、ムササビ、
ヒミズ、キツネ、アカネズミ
鳥類：ヨタカ、カッコウ

ため池の創出

植物：ヨシ、ヒメガマ、ガガブタ
両生類：ナゴヤダルマガエル、アカハライモリ
魚類：イチモンジタナゴ、メダカ
昆虫類：ゲンゴロウ、タガメ

農村・集落の発達

植物：ススキ
哺乳類：タヌキ、イタチ、ノウサギ、
ハタネズミ、アカネズミ



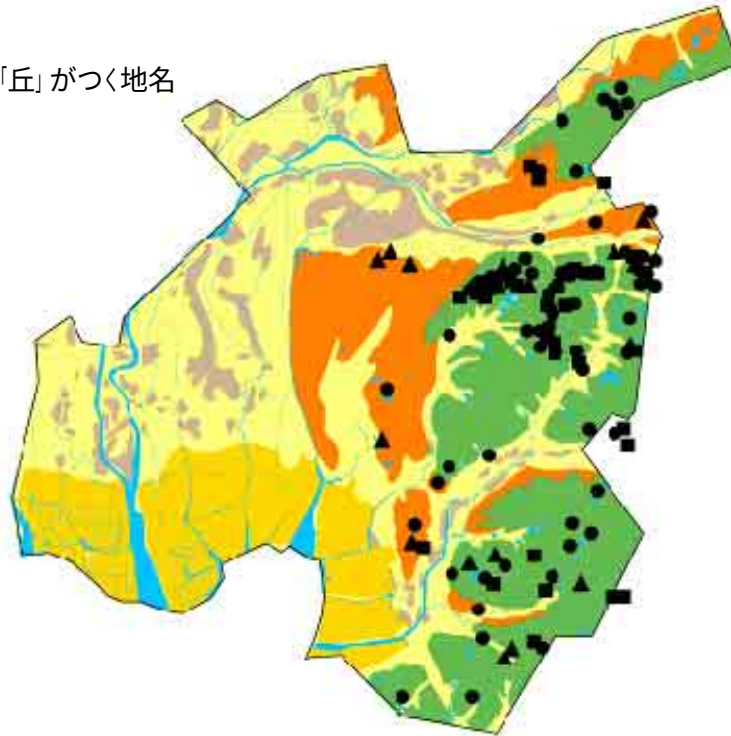
- 有史以来、自然の改変は徐々に進行してきましたが、土地利用は西部・中央部・東部それぞれの自然条件に合わせたものでした。
- 人の暮らしに必要な燃料や食料は、流域圏内から供給され、生物資源の循環ができていました。
- 100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていたと考えることができるでしょう。

地名と地形を比べてみると・・・

地名は、その土地がもつ地形や特徴を知ることができます。

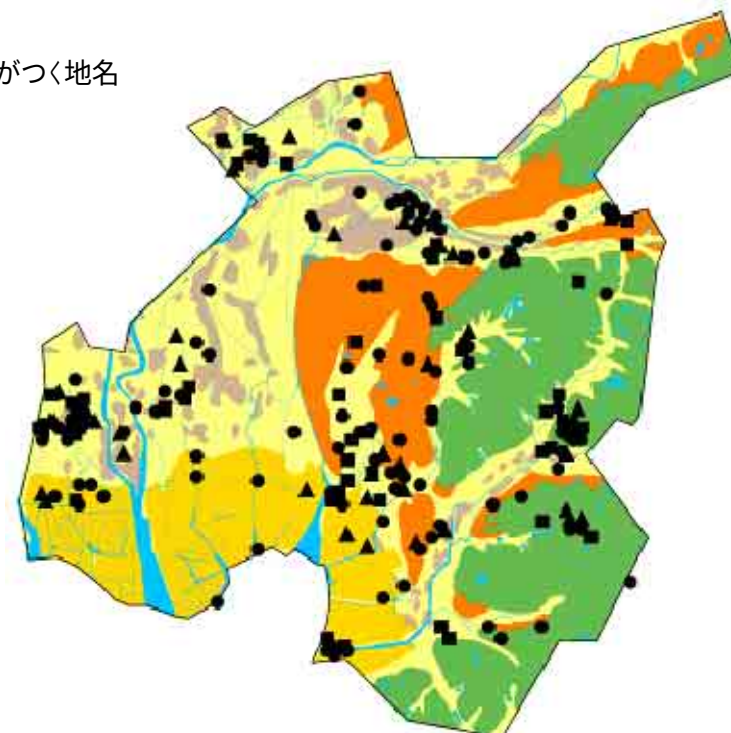
名古屋市内の地名やバス停名、学校名をみると、「台」や「丘」がつくものは、台地や丘陵地に、「田」がつくものは、水田として利用されていた西部の沖積平野や、中央部・東部の低地に集中しています。

「台」「丘」がつく地名



●:地名
■:バス停
▲:学校

「田」がつく地名



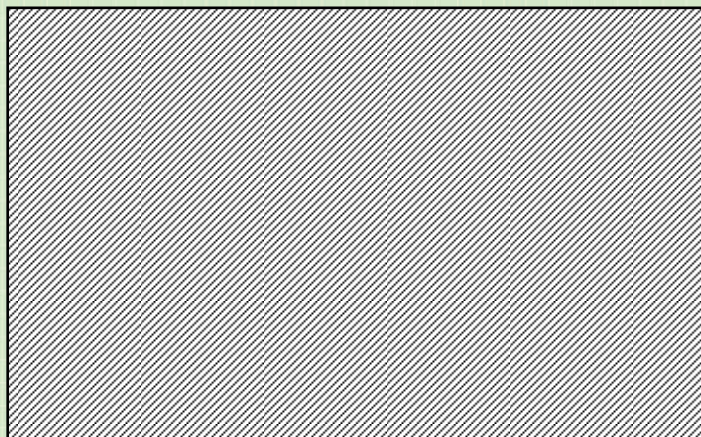
(3) 近代都市なごやの発展

— 近代化とともに、まちや人の暮らしが、風土から離れていく —

明治後期の栄町 (現在の中区栄三丁目)



昭和11年頃の広小路本町 (現在の中区錦二丁目)



昭和17年頃の名古屋駅 (昭和12年完成)



出典：景観が語る名古屋 (財団法人名古屋都市センター 1999年)

① 近代都市としてのなごやの変貌

—都市区域の拡大と資源循環の崩壊を招く、近代的インフラ整備の始まり—

- 明治以降、本格的に近代的なまちづくりがはじまり、今のなごやのまちができました。
- ここでは、その様子を見てみましょう。

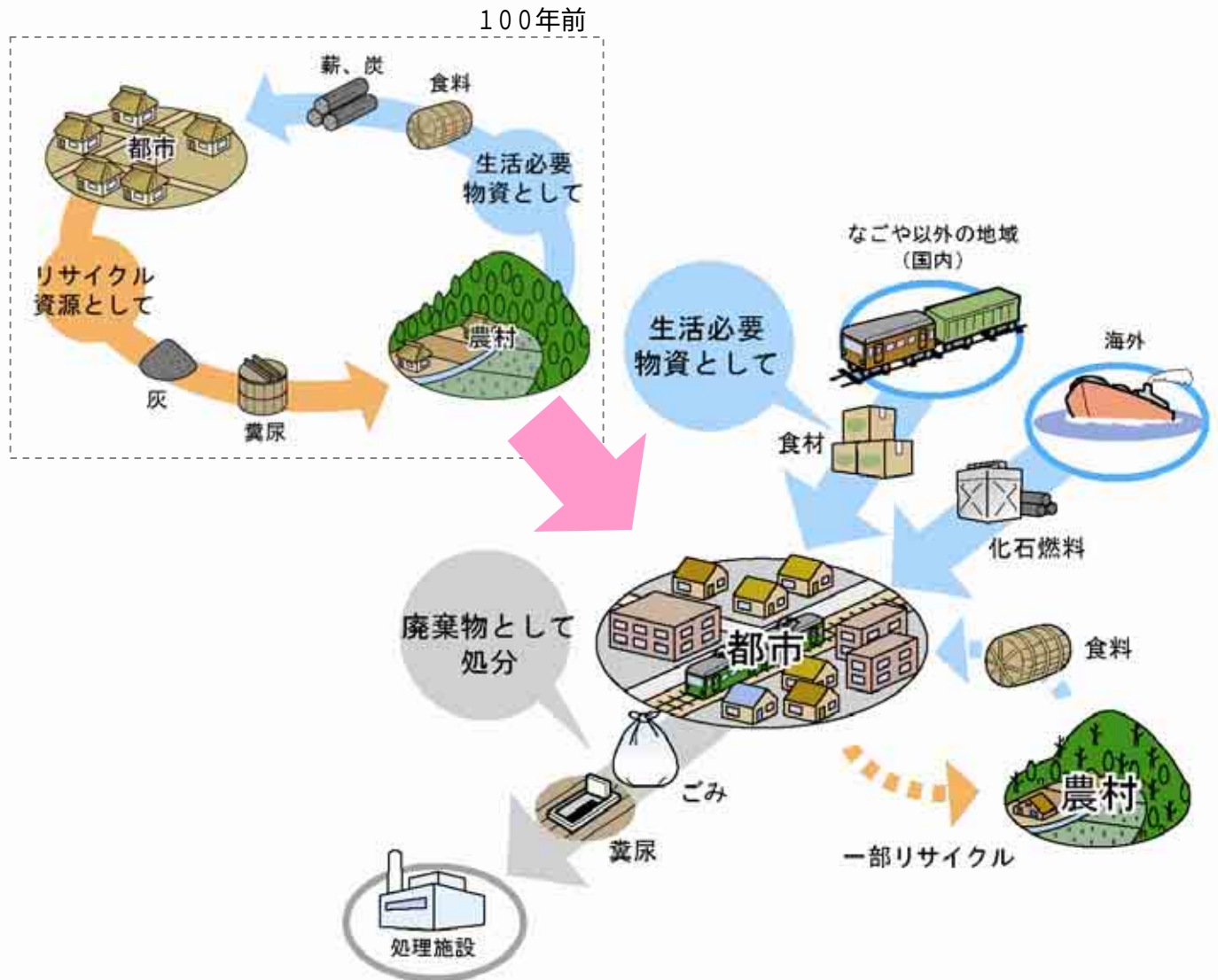
近代都市への歩み (19世紀末～20世紀前半)

	都市の近代化と戦時体制	築港と運河の開削	区画整理と公園整備	人口
明治	'86 名古屋停車場(笹島)開設 '87 広小路に柳の街路樹 '89 名古屋市制施行(人口16万) 市内に電灯がともる 東海道線全通 '98 市電開通(笹島一栄間) 交通インフラの曙	土砂堆積による熱田湊の遠浅化 ↓ 築港工事に着手('96) ↓ '07 名古屋港開港		16万人
	'07 熱田町を合併(人口35万) 衛生インフラの曙 '10 上水道着工(→'14給水) '11 下水道着工(→'23竣工) '12 し尿汲み取り市営開始 '15 八事火葬場開設 '17 ごみ焼却所開設	'10 新堀川開削 川沿低湿地の工場用地化 この頃、堀川のはえ(銀ふな)が名物に	'05 耕地整理はじまる '09 鶴舞公園開園 最初の総合公園 '14 童謡「ふるさと」 この頃、第1次里山再生運動が全国的に起こる	35万人
	'20 (旧)都市計画法施行 市営住宅創設 '21 市立保育園開設 16町村を合併(人口62万) '22 市電の市営化 '23 日本初の街路灯(広小路) '26 市内での土葬禁止	'24 街路・運河網都市計画決定 都市計画の曙	戦前の耕地整理・区画整理面積 戦前市域の55% (現在市域の27%) '25 区画整理はじまる '26 都市計画公園の決定	62万人
昭和	'34 人口100万人突破 戦時統制 '38 ガソリンが切符制に '40 市バスに木炭バス導入 物資統制(米の通帳制、砂糖・味噌・木炭等の切符制) '41 ガソリン車禁止(代燃化) '45 終戦(市域の1/4を焼失) '46 復興都市計画の決定	'32 中川運河完成 南西部の工場用地化 この頃、堀川の水質悪化すすむ ('35のBOD35mm/l)	'35 東山公園・志賀公園開園 '37 東山動植物園開園 '39 風致地区の決定 5,400ha '40 都市計画緑地の決定 826ha 緑地整備の曙 戦中・戦後の燃料用伐採 → 東部丘陵のはげ山化 '46 農地改革	100万人

(3) 近代都市なごやの発展

近代化により変化した資源循環

- ・都市が拡大する一方で、農村は縮小し、都市と近郊農村のつながりが弱くなりました。
- ・広域的な物流は生産地から都市への一方通行となり、廃棄物が再利用される循環のしくみがなくなっていました。



- 明治22年(1889)の市制施行で、名古屋市は人口約15万7,000人、面積約13.34km²でスタートしました。
- 明治・大正から昭和の初頭には経済界の活況に伴い、商工業都市として順調な発展を続けました。
- 商業や工業の発達によって、人口は増加し、市街地が拡大しました。
- また、都市の廃棄物を活用していた農村の縮小や化石燃料への転換によって、生物資源の循環は大きく変化しました。

② 20世紀後半の急激な変化(まち)

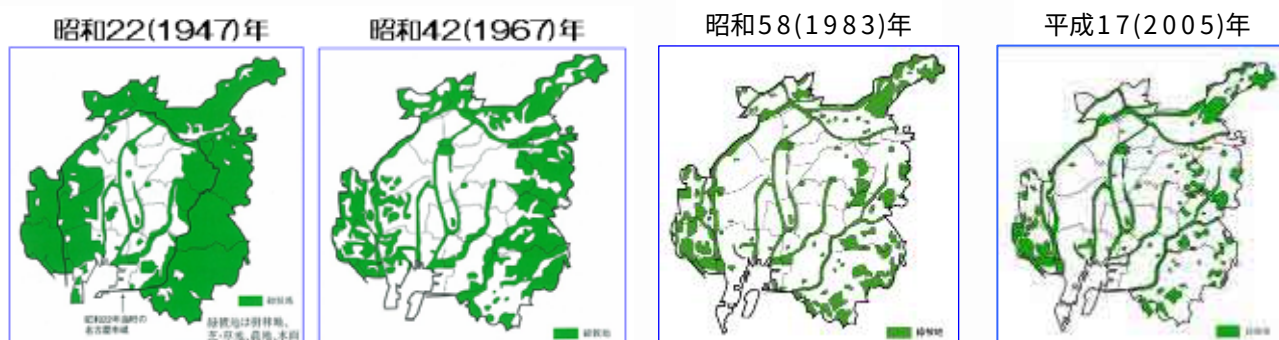
— 自然の摂理を超えた市街化により、失われていく生息地 —

- 20世紀の後半になると、技術の進歩が自然の制約を超えた開発を可能にし、一層の市街化が進みます。

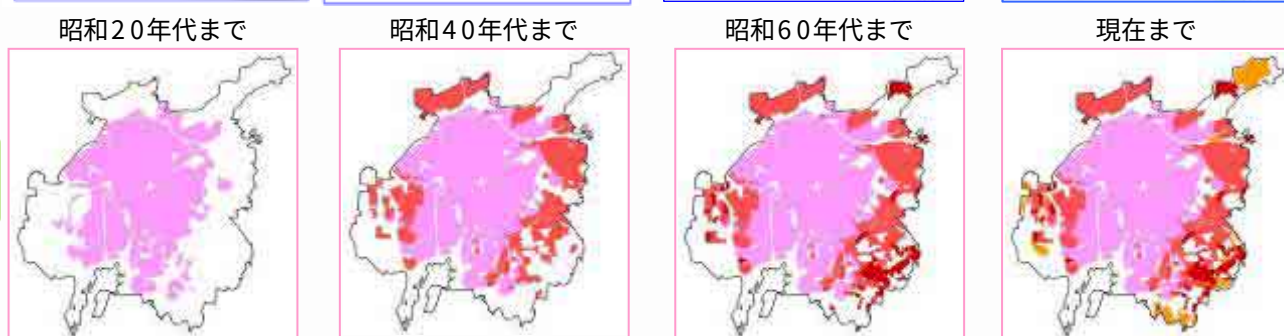
土地利用の変化

昭和40年ごろを境に、農地及び山林が減り、宅地が増え続けて急激な都市化が進んでいきます。農林漁業に携わる人も激減しています。

緑被地



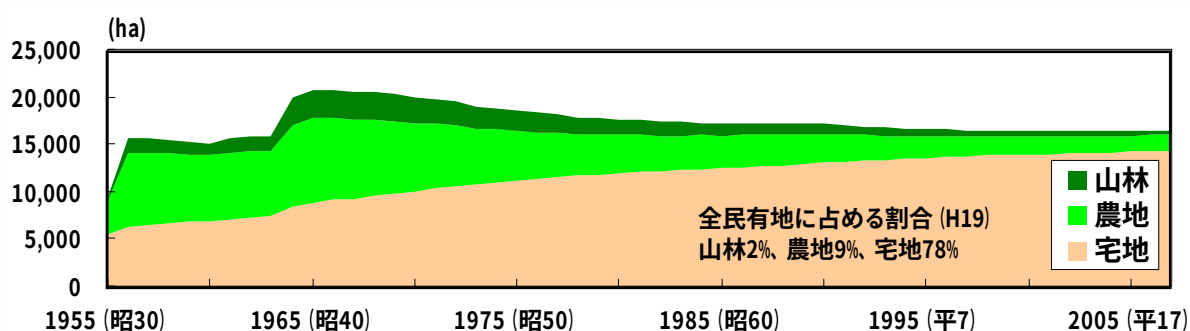
土地区画整理



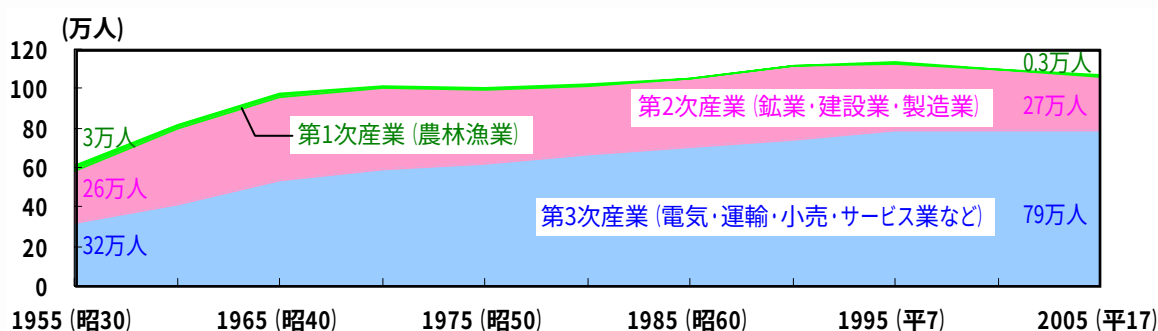
出典：名古屋市土地区画整理区域図（平成21年、名古屋市） 名古屋市みどりの基本計画 花・水・緑 なごやプラン（平成13年、名古屋市）

農地山林面積

※民有地



就業者数



出典：名古屋市百年の年輪—長期統計データ集—（平成元年、名古屋市） 名古屋市統計年鑑（平成元年～平成20年、名古屋市）

(3) 近代都市なごやの発展

いきもののすみかの変化

100年前

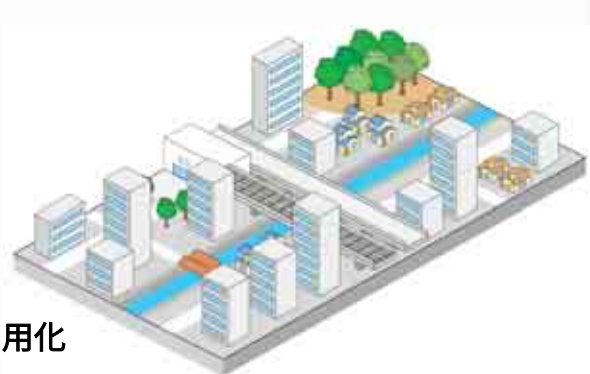
現在

西部(沖積平野)



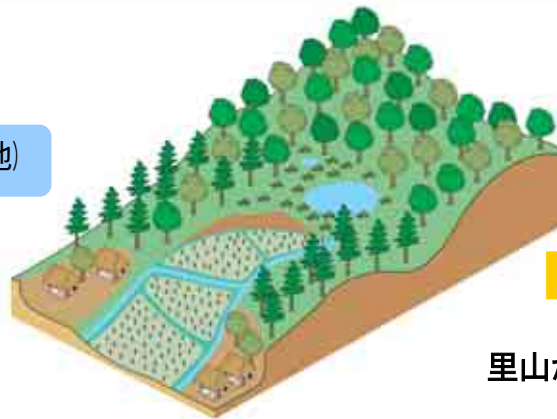
農地から宅地へ

中央部(台地)



宅地の高度利用化

東部(丘陵地)



里山から宅地へ

- 高度成長期の大都市への人口流入の受け皿として、市域周辺部での区画整理が大きく進み、人口は著しく増加しました。
- 現在では市域326.43km²、人口約225万人の規模となりました。
- 開発による緑地・ため池の消失や公害の発生など、生きもののすみかは大きく変化し、生息空間の減少や繁殖場所が失われることになりました。

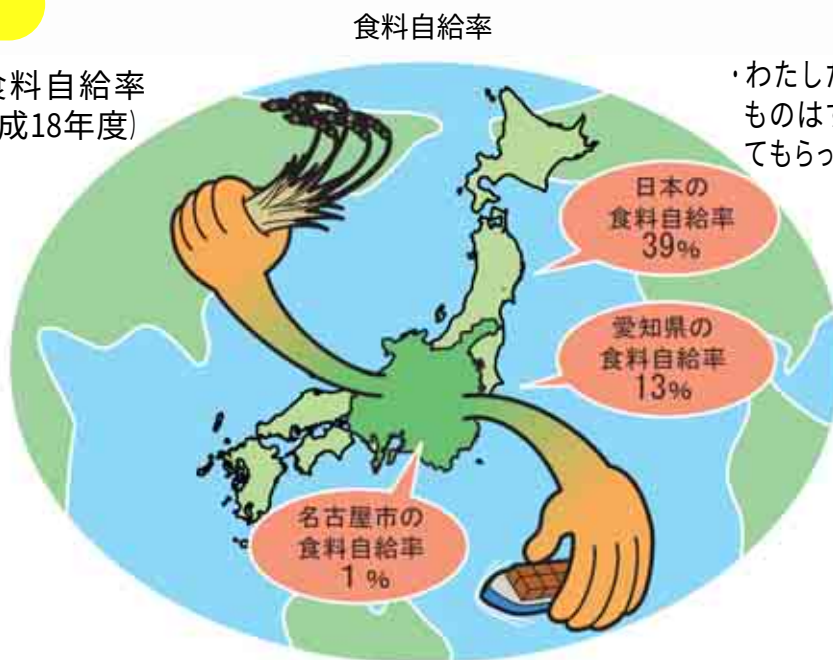
③ 20世紀後半の急激な変化(暮らし)

— 資源循環の崩壊が進み、風土を無視した暮らしへ —

- 日本の重化学工業化により経済が大きく発展し、生活スタイルは急激に変化しました。
- 物流システムが発達し、周辺地域との生物資源循環システムは崩れてしまいました。
- 化石燃料を使った大量生産・大量消費の暮らしがはじまります。

暮らしの変化

・名古屋市の食料自給率は、約1% (平成18年度)です。

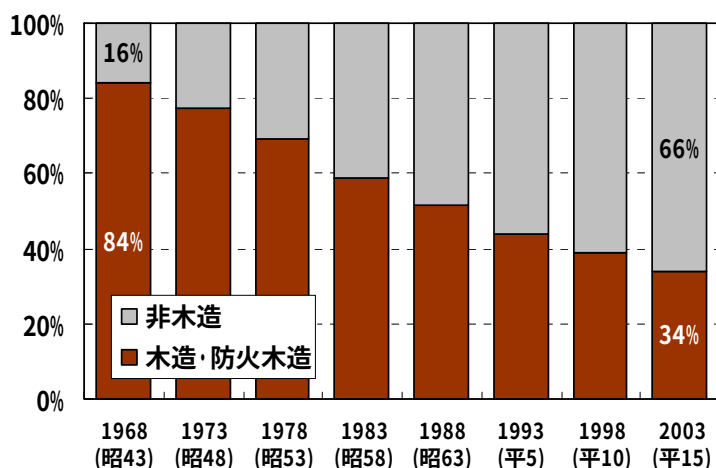


・わたしたちが普段食べているものはすべて、市外で生産してもらっているといえます。

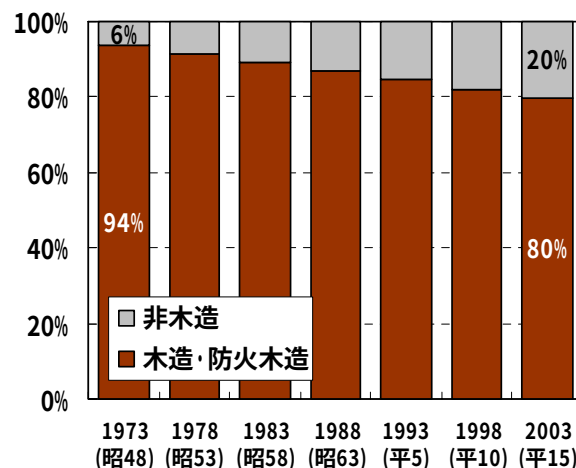
農林水産省HPより作成 (値は平成18年度のもの、名古屋市の自給率は同HP自動計算ソフトにより算出)

- ・木造の住宅は減少し、鉄骨・鉄筋コンクリートなど非木造の住宅が増加しています。
- ・マンションなど共同住宅の9割以上は非木造住宅で、一戸建ての住宅でも木造住宅の割合は減少しています。

構造別住宅数の割合



一戸建て住宅の構造別住宅数の割合



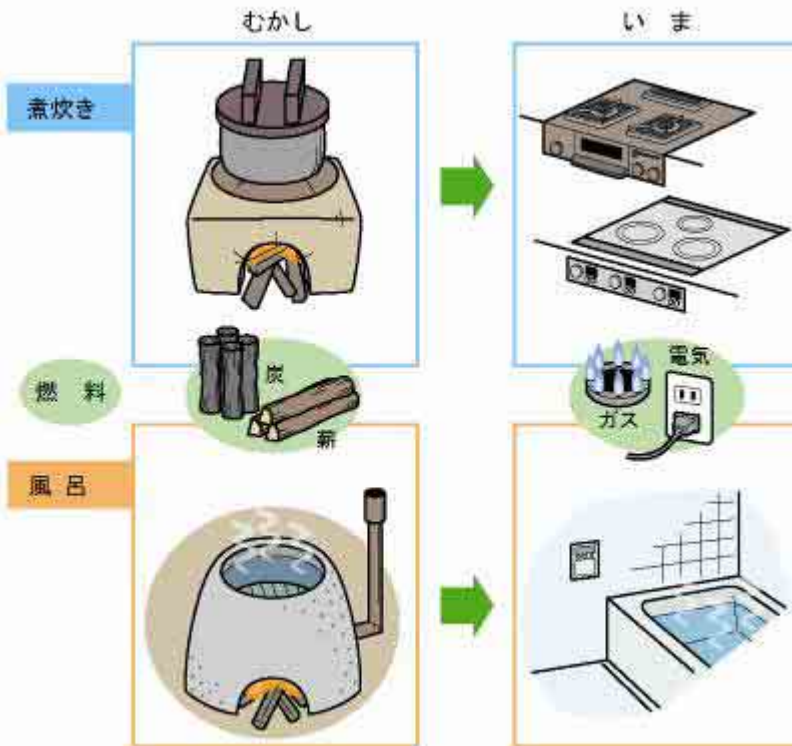
出典:名古屋の住宅・土地—平成15年住宅・土地統計調査結果— (平成17年、名古屋市)

(3) 近代都市なごやの発展

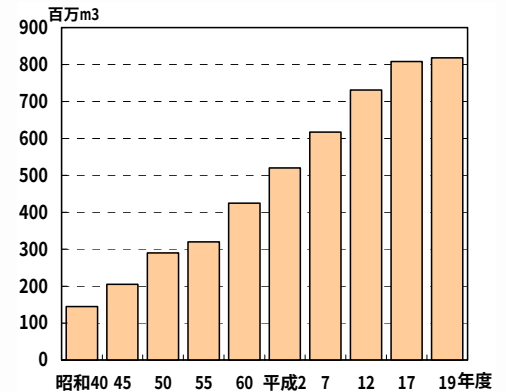
生物資源から化石燃料へ

- ・暮らしの中で使用する燃料は、炭や薪から、石油やガスなどの化石燃料へと大きく変わりました。
- ・ガスや電力の使用量は増加し続けています。

エネルギーの転換

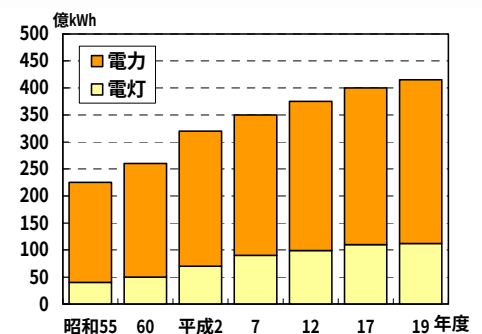


名古屋市内の都市ガス消費量の推移

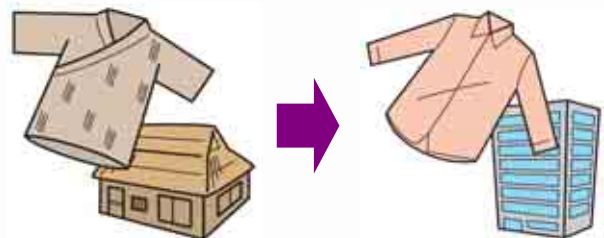


出典：名古屋市統計年鑑等より作成

名古屋市内の販売電力量の推移

注：中部電力名古屋支店管内の数値
出典：名古屋市統計年鑑等より作成

- ・衣料品の原料は、綿からナイロンやレーヨンなどの化学繊維に変わっていきました。
- ・アジア諸国から安い製品を大量に輸入するようになり、なごやでは伝統的な繊維や衣料品が生産されなくなっていました。



- 産業構造の変化にともない、伝統工業が衰退し、大量生産の時代になりました。
- 原料やエネルギーの海外への依存度も高まっていきました。
- 物やエネルギーを大量に消費することによって、豊かで快適な暮らしがもたらされましたが、風土にあった暮らしは姿を消していきました。